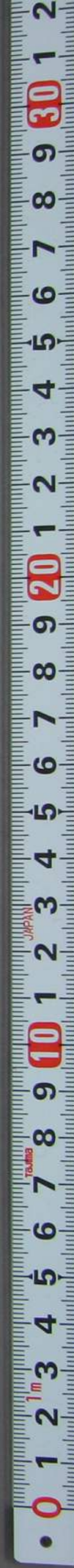


43



ホウス氏所著

下ノ關償金一件

千八百七十四年十一月東京ニ於テ

七十五葉

114  
A4411

下ノ関償金一件



大正十一年四月  
侯爵邸寄贈

初、千八百六十四年米佛英蘭四國ノ公使ヨリ  
日本政府ニ向ヒ討索セル下ノ関償金ト称スル  
償金一件處分ノ事ハ其討索ヲ為スノ原目タル  
一國ニ於テ時々衆庶ノ深ク注意スル所トナリ  
又其他ノ國々ニ於テモ稀レニハ稍之ニ注意シ  
テ論議スル所トナリシカ日本ニ於テハ多年此  
事ノ為メ頗ル煩勞憂悶シ日本人ハ嘗テ其償金  
討索ノ正義ヲ認メタルヲナク常ニ其討索ヲ為  
ス趣旨ノ廉潔ヲ疑ヒ且ツ外國公使ヨリ暗ニ論

セラレテ其償金ヲ拂フタル毎ニ日本ノ為メ會  
計上ノ不都合ヲ生シタルノミナラスカニ壓抑  
セラレ已ムヲ得ス其討索ノ正義アルヲ怒メタ  
ル者ト思做シタリ然レ氏千八百七十四年七月  
最終ノ年賦ヲ拂フタルニ曰テ其償金ノ全數ヲ  
不殘拂ヒ了リシカ當時ノ景況ハ頗ル深ク注意  
シテ之ヲ考窮スヘキ者アレハ其論ハ暫ク後文  
ニ褻リ此ニ今之ヲ論ス可キハ斯ク外國ヨリ迫  
テ償金ヲ討索スルヲ觀ル日本人ノ心地ハ甚タ  
不愉快ニシテ右討索ヲ為ス國ノ中其一ニ就キ

言フ時ハ只管其貪慾ヲ恣ニ為サントスル意ニ  
原キ其他ノ三國ニ就キ言フ時ハ政治上ノ陰謀  
ヲ為ス策畧トシテ無慈悲ニ金ヲ奪取ルナリト  
思フニ在リ而シテ米國ノ如キハ議院ニ於テモ新  
聞紙ニ於テモ右償金ノ殘リ高ヲ拋棄シ又然ノ  
ミナラス既ニ其政府ノ日本ヨリ受取リタル金  
高ニ至ル迄ヲ還サントスルノ論ヲ發セシテ數  
回ニ及々人民モ亦其論ニ應スル者多ク一時ノ  
勢ニテハ此論將ニ採用セララルヘキカ如ク見ヘ  
タレハ日本人ハ之ヲ信シテ米人ノ助ケヲ得已

レノ權利ノ牢固ナラシメント望ミタリ然ルニ  
米國公使ハ最後ノ時ニ至リ其同僚ト合シテ償  
金拂濟ノ事ヲ促カシタルニ曰リ大ニ日本人ノ  
意ヲ害シ其害タルヤ初メヨリ常ニ不易固執シ  
テ償金ヲ討索シタルニ比スレハ更ニ一層甚シ  
キ者トス

右償金討索ノ事ハ既ニ過キ去リテ其結局ニ至  
リシ者ト思做ス可キカ故ニ米利堅欽成ハ此事  
ニ管係アル歐洲ノ三國ニ於テ天然ノ公道正義  
ヲ思フ性情ニ原ツキ更ニ復タ其論ヲ起スニア

ラサレハ世人ノ棄テ顧ミサル所タル可シ蓋シ  
現ニ其償金高ヲ拂フヘキヤ否ノ如キハ今ニ至  
テ之ヲ論スルモ既ニ遅ク又千八百六十四年ニ  
初メテ演述シタル以來十年間固執シテ辨論セ  
シ其償金討索ノ憑據ハ未タ嘗テ詳カニ之レカ  
当否ヲ論セシ者ナク其討索ノ原曰ハ凡ソ日本  
ト外國トノ交際上ニ管スル爾餘ノ諸事ト同シ  
ク世人敢テ之ニ注意セズ而シテ其真ノ事情ヲ  
取調ヘント為スニハ大ナル障碍アルニ非レバ  
世人ノ棄テ之ヲ顧ミサルニ曰リ其事情ヲ勉メ

テ世ニ表示セント為ス者ナク間々或ハ少シク  
此事ニ意ヲ留ムル者アリト虽モ嘗テ数年以前  
下ノ関海峡ヲ通行セル外國船ニ向ヒ發砲シタ  
ルカ為メ一箇ノ勃然ヲ生シ強大ナル西洋各國  
ノ兵船隊其海峡ヲ守ル岩管ヲ砲撃シテ之ヲ破  
壞シ而ノ右發砲ノ罪ト報復ノ役ヲ發セル費用  
トノ為メ夥多ノ償金ヲ討索セシ等ノ事情ニ至  
テハ恐クハ明亮ニ之ヲ解悟セサル可シ又米國  
ニ於テハ間々日本人ノ其償金ヲ拂フヘキ義務  
ヲ解除セント欲スル意向ヲ示シタルハ僅カニ

其數十万弗ヲ抛棄セハ之レカ為メ全世衆ノ人  
民ヲシテ米國ノ寛大ナルヲ稱賛セシメ且ツ日  
本人ヲシテ深ク其恩誼ヲ感謝セシム可シト思  
フニ過キスシテ元來右四ヶ國ノ兵ヲ發シテ岩  
管ヲ撃チシ處置並ニ酷烈ニ償金ヲ討索セシ處  
置ハ或ハ稍々正義ニ背キシ者ニ非ルヤ又其償  
金ヲ抛棄スルハ唯僅カニ已レカ名譽ヲ害セス  
シテ既往ノ過テヲ悔イ改ムルニ非ルマノ諸事  
ニ至テハ嘗テ世人ノ此ニ其意ヲ注ク者ナク皆  
日本人ノ過失或ハ其罪科ハ明白ニシテ疑ヲ容

ル可カラスト思ヒ日本在留外國公使等ノ証言  
ハ敢テ之ヲ答メス今日ニ至ル迄世人ノ普ク信  
スル所ハ日本國ノ重大ナル罪ヲ罰スル為メ下  
ノ関ヲ撃破シ且ツ其後諸般ノ手續ニ及ホシタ  
リト思フニ在ルノミ

斯クノ如キ世人ノ曖昧タル考慮ヲシテ勉メテ  
實在ノ事情ト符合セシムル為メ宜シク此ニ左  
ノ諸件ヲ記ス可シ

第一 千八百六十三年ノ夏米蘭仏三國ノ船  
下ノ関海峡(日本内海)ノ北西ノ入り口ノ岸

ニ造リタル砲台及々下ノ関港ニ在ル日本船  
ノ為メニ打掛ケラレタル

第二 米仏二國ノ船ノ打掛ケラレタル後直  
チニ米仏ノ兵船報復ノ為メ下ノ関ヲ砲撃シ  
テ烈シキ懲罰ヲ為シ之レカ為メ嘗テ日本人  
ノ加ヘシヨリ更ニ大ナル損害ヲ人命及々財  
産ニ加ヘタル

第三 千八百六十四年ノ夏英仏米蘭ノ公使  
輩英公使ノ勸奨ニ因リ四國合同ノ兵船隊ヲ  
發遣シテ岩宮ヲ奪ク之ヲ破壊スルニ決シ現

ニ其決定ノ如ク施行シタル

第四 其後ノ條約ニ目ノ四ヶ國公使ハ右出

兵費用ノ賠償並ニ條約國權利損害ノ賠償ト

シテ三百万弗ノ高ヲ討索スルヲ協議シタル

ト

第五 敷度ノ遅延ノ後千八百七十四年七月

ニ至リ右償金ノ最終ノ年賦高ヲ拂フタル事

右ノ諸事ハ世人ノ普ク怒ムル所ノ宛然タル実

事ナレト今ニ至ル迄凡ソ世上ニ傳布セシ諸般

ノ報告ハ罪ヲ日本ニ歸スルヲ以テ尋常已レカ

利ト為セル輩ノ言ニ出テタル者ナレハ必ス右

ノ実事ヲ曲ケ以テ各種ノ過失罪科ヲ皆日本ニ

歸シタルハ今此書中其誤ヲ正シ更ニ公平ニ右

ノ実事ヲ表明論究シテ以テ左ノ要件ヲ辨解ス

可シ

第一 初メ右三ヶ國ノ船日本人ノ為メニ打

掛ケラレシ時原来其処ニ進航スル權利ノア

ラサル旨ヲ論スヘキ確固タル據アル

第二 右外國船ヲ打掛ケタルハ當時外國人

ノ怒メシ日本政府ノ處為ニアラス又日本政



府代理人ノ處為ニモアラス當時江戸ノ政府  
ト隙アリテ其後ニ至テハ其政府ト烈シキ争  
鬪ヲ起セシ地方領主ノ處為ニ係ル

第三 最初報復ノ舉ハ米仏兩國兵船ノ指揮  
官自己ノ意ニ任カセテ之ヲ為セシ或ハ其  
兩國公使ノ倉卒ナル許諾ヲ得テ之ヲ為シタ  
ルニ在テ本國政府ノ命令ニ回リ之ヲ為シタ  
ルニハアラサル

第四 最初日本人ニ打掛ケラレシ米船ハ全  
ク損害ヲ被ルナリ又仏船ハ唯僅カニ少許

ノ損害ヲ被リタルノミナリシニ各國兵船ノ

砲撃ニ目リ少ク凡日本船一艘日本村一ヶ處  
砲台一ヶ處ヲ破壊シ且ツ日本人三四十名ヲ  
殺シタルハ其懲罰ノ頗ル酷シカリシ

第五 下ノ関へ兵船隊ヲ發遣スルノ籌策ニ  
就テハ英國公使之レカ主謀タリト虽モ英國  
船ハ嘗テ一回モ其處ニテ打掛ケラレシ事ノ  
アラサリシ

第六 英國公使ノ處置ハ本國政府屢々之ヲ  
制止シ兵船隊發遣ノ事モ本國政府ヨリ之ヲ

禁シタリ然ルニ公使ノ既ニ已レカ處置ヲ成  
就シ終リタル後ニ至リ之ヲ罰スルモ最早其  
詮ナキニ及ミタルカ故ニ本國政府ニ於テ公  
使ノ處置ヲ許認セシト

第七 米國公使ハ自國人ノ被リタル損害ノ  
事ニ付キ償金ノ條約ヲ結フヘキ旨ヲ承諾シ  
其條約ヲ商議スル際自國兵船ヲ下ノ関ニ進  
航セシメ他國兵船ヲ助ケテ破壊ノ業ヲ為サ  
シメタルト

第八 仏公使ハ戦鬪ヲ為ス可カラサルノ確

固タル命ヲ受ケ且ツ當時專ラ耐忍ヲ趣旨ト  
為スヘキノ判然タル情實アルニ敢テ之ヲ顧  
ミサリシト

第九 兵船隊發遣ノ頃ハ日本ニ内乱アリテ  
江戸政府ハ現ニ其有罪ノ地方領主ヲ壓服シ  
テ之ヲ懲罰スルニ勉メタレ下ノ関開港ノ  
事ノ如キハ戦鬪ノ稍々鎮定シテ其開港ノ業  
ヲ義スルニ足ルヘキ兵ヲ得ルニ至ラハ速カ  
ニ之ヲ為サント約シタルノミニシテ其開港  
ノ期日ハ未ダ確定スル能ハサリシト

第十 償金ノ討索ハ損害ト費用トノ償ヲ得  
ルヲ以テ其名ト為セ氏故サラニ其償金ノ高  
ヲ過分ニシ以テ日本政府ノ之ヲ拂フヘキ資  
カナキニ乗シ之ニ代ヘテ強テ日本ノ政治上  
ニ管スル外國ノ重大ナル需要ヲ諾セシメン  
ト期望セシト

第十一 右償金ノ皆濟ニ至ル迄ハ其金ヲ受  
取ルヘキヲ口実ト為シ常ニ日本政府ニ迫リ  
テ其政府極メテ不義知ナル處置ヲ為サシメ  
ント圖リ且ツ同政府ノ暫ク之ヲ遅延スルニ

アラスンハ國ノ安危ニ管スヘシト思ヘル者  
事ヲ急速ニ行ハシメント促カセシト

抑日本ノ内海ハ地圖ヲ以テ知り得可キカ如ク  
日本ノ三大島ニ繞環セラレ大洋ヨリ其内海ニ  
入ル海峡四ヶ処アリテ即チ西ハ下ノ関海峡東  
ハ和泉海峡及ヒ鳴門海峡南ハ豊後海峡是レナ  
リ而シテ其内海ノ地勢ハ爾餘ノ内海ト其趣ヲ異  
ニシ國政上ニ就キ之ヲ言フ時ハ唯一ヶ國ノ領  
地ニ全ク繞環セラレタルト并ニ各國ノ自由ニ  
用フ可キ大洋ト通スル數箇ノ出口アルト等皆

土耳其ノマルモラ海ニ類似セリ

万国公法惠頓氏所著ノ原則ニ循ヘハ凡ソ各國沿海ノ領地ハ諸海岸ニ於テ海上ニ一リノグノ処ニ達ス可シト惠頓氏又曰ク凡ソ兩辺共ニ同國ノ領地ニ號環セラレ且ツ此海ヨリ彼海ニ通スル海峡海盆ノ狹クシテ兩岸ヨリ發スル砲彈ノ及ノヘキ者ハ亦其國ノ領地内ニ在リト依テ今迄ヲ論スルニ公法原則ノ義意ヲ斯ノ濶大ニ解スル時ハ其原則ノ日本内海ニ適合スヘキヲ明カニシテ其内海ニ通スル海峡ハ何レモ皆其廣サ六

哩ニ及ハス殊ニ下ノ関海峡ノ如キハ僅カ半哩ニ過キササル処アリ然レ惠頓氏ノ書中ニ又前文原則ノ意ヲ更ニ限制シテ曰ク「若シ斯クノ如ク接合セルニ海ノ通航自由ナラハ之ノ接合スル海峡ノ通航モ亦同シク自由タル可シト故ニ今日本ノ其内海ヲ專管スル權ノ有無ヲ定メシカ為メ先ツ右四箇ノ海峡ハ万國ノ当然自由ニ用フヘキニ箇ノ海ヲ接合スルヤ否ヲ考究セサル可カラズ而シテ其公法上ノ適例ヲ撰ムニ夫ノ土耳其ノマルモラ海ニ若ク者ナケレハ今此海

ノ地勢ヲ約言スルニ抑此海ハ全ク土耳其ノ領  
地ニ繞環セラレ其一方ノ入口ハダルダ子ル  
ス海峡ニシテ又一方ノ入口ハボスフラリエス  
海峡ナリ而シテ此海峡ハ其廣サ六里ニ足ラサル  
処アリテ近世ノ公法家ハ皆此海ノ歐洲公法上  
ノ地位ヲ明カニ辨セシカ惠頓氏ハ殊ニ詳細ニ  
之ヲ解明シ而シテ土耳其ハ特別ノ條約ヲ結ビテ  
右ニ海峡通航ノ特許ヲ外國ノ商船ニ授ケタレ  
凡其特許ノ外國兵船ニ及ハサル旨ヲ説キタリ  
依テ今此ニ其言ヲ引抄スルニ「抑土耳其ニ於テ

ハ其國備警ノ為メ設ケシ旧キ規則アリテ外國  
兵船ノダルダ子ルス及ヒボスフラリエスニ  
海峡ヲ過キリテ君士但丁海峽ニ入ルヲ從來常  
ニ禁セシカ千八百四十一年七月十三日倫敦府  
ニ於テ歐洲五大國ノ土耳其ト結ビタル條約ヲ  
以テ特ニ其規則ヲ悉曉シタリト尋テ千八百五  
十六年ノ條約ハ更ニ土耳其ノ權利ヲ確定シ方  
今ニ至ル迄商船ト虽モ免許状ヲ得スレテ通航  
ス可カラサルノ定メアリ蓋シ此事ニ就テハ各  
公法家ノ著書ニ載スル所畧其義意ヲ同ウスル

カ故ニ今此ニ其各著書ノ文詞ヲ引抄スルノ要  
ナシト虽モトラベルス、チウイス氏ハ其所著ノ  
万国公法中ニ殊ニ之ヲ詳記シ其辨論ノ明亮ナ  
ルヲ近世ノ公法家ニ卓越シタレハ其文詞ヲ左  
ニ引抄ス

若シ内海ノ全ク一國ノ領地ニ繞環セラレ其  
大洋ト通スル道ハ僅カニ狭キ海峡ニシテ其  
國ニ於テ右海峡ヲ占領スルヲ得可キ時ハ内  
海ノ如キモ亦其國ニ於テ占領シ之ヲ已レノ  
版圖ニ歸スヘキヲ猶其辺岸ノ陸地ト同シカ

ルベク然ル時ハ其内海ハ總テ其周圍ニ在ル  
國ノ命運ニ從フ可シ……又之レト同一ノ  
理ニ基キ若シニ海ヲ相接合セシムル海峡ノ  
狭クシテ其兩岸ノ共ニ同國ノ所轄ニ係ル時  
ハ其國ニ於テ亦其海峡ヲ所轄ト為スヲ得  
可シ……又一國ニ於テ全キ内海或ハ海湾  
或ハ海峡ヲ專管スル時ハ爾餘ノ國ニ於テ其  
國ノ意ニ逆ト強テ之ニ通航スルノ權ナシ……  
……蓋シ土耳其政府ノ地中海ヲ黑海ト相接  
合セシムル海峡及ヒ此ニ海ノ間ニ在ル内海

即チ海ヲ專管スルノ權ハ以用ノ權ニ基キ  
歐洲ノ諸大國皆之ヲ認聴シタリ……抑土  
耳其政府ノ權ハ其初メ土國ニ於テ獨リ黑海  
ノ濱岸ヲ專管セシ時ニ起リタレ氏其後魯西亞  
人ノ大ニ其濱岸ノ地ヲ得タル以來ハ魯國ニ  
於テ歐洲ノ公法ニ循ヒ黑海ニ通航シ且ツ其  
商船ヲ地中海ニ出テシムルノ權ヲ得タリ然  
レ氏土耳其政府ハ當時歐洲耶蘇教各國ノ採  
用セル公法ヲ認ムルナケレハ衆令歐洲各  
國ニ其威カアリト雖モ土耳其ヲシテ強テ其

公法ヲ遵守セシムルノ推理アルトナシ依テ  
土耳其ハ各國ト結ビシ條約ノ外敢テ其他ノ  
律法ヲ遵守セサルニ曰リ各國皆特ニ土國ト  
條約ヲ結ビテ其國ノ商船自由ニ右海峡ニ通  
航スルノ權ヲ定メ就中魯國ハ千七百七十四  
年ニ其條約ヲ結ビ英國ハ千七百九十九年ニ  
其條約ヲ結ビ仙國ハ千八百二年土國ハ千八  
百六年ニ其條約ヲ結ビタリ而シテ土耳其政府  
ハ各國ト和親セル際ト雖モ常ニ各國兵船ノ  
右海峡ヲ過キルヲ許サ、リシカ千八百四十

一年七月十三日仏國ヲ除クノ外歐洲諸大國  
ノ倫敦ニ於テ土國ト結ビタル條約ニ目ヨリ右  
土國旧來ノ規則ヲ特ニ確認シタリ

右ニ記スル土耳其ノ景状ト日本ノ景状トハ互  
ニ相類似セルノミナラス往々互ニ相符合シ又  
右トラベルスチウイス氏ノ説ノ日本ノ地勢ト  
其外國交際トニ直切ニ適用シ得ヘキハ明クニ  
シテ敢テ疑ヲ容レズ蓋シ日本ノ内海ハ日本領  
地ノ為メニ全ク繞環セラレ且ツ其大洋ト通ス  
ル道ハ日本ノ所轄ニ為シ得可キ一海峡(或ハ數

海峡)ニ過キザレハ日本ハ即チ其内海ノ全部ヲ  
專管スルノ權アリテ爾餘ノ國ハ日本ノ意ニ逆  
ク強テ之ニ通航スルノ權ナシ而メ又日本ノ旧  
キ規則ハ一切外國船ヲ其沿海ニ寄セ附ケザル  
ニ在リテ千五百年代以來稍長崎港ヲ開キタル  
ニモセヨ且ツ日本ハ當時歐洲耶蘇教各國ノ採  
用セル公法ヲ認ムルトナキハ何人ト虽モ之ヲ  
疑フ者ナカル可シ又チウイス氏ハ「各國皆特ニ  
土國ト條約ヲ結ビテ其國ノ商船自由ニ土國ノ  
海ニ通航スルヲ得タル旨ヲ言フト虽モ日本ノ



海峡及之内海通航ノ事ニ付テハ未ダ嘗テ斯ノ  
ノ如キ條約ヲ結ビシトナク又外國ヨリ之ヲ言  
出セシトナシ然ラハ即チ「總令」歐洲各國ニ其威  
カアリト虽モ強テ其海峡及之内海ニ入ル可キ  
ノ権理アルトナシ而ノ又歐洲各國ノ土耳其政  
府ト條約ヲ結ビタルトナシトセハ想フニ方今  
必ス特別ノ免許状ヲ得テ通航スル商船ノ如キ  
モ今ニ於テ必ス土國海峡ノ通航ヲ禁セラル可  
ク又兵船ノ如キハ前文ニ記セシ如ク今ニ至ル  
迄全ク其通航ヲ禁ラレ千八百五十六年土耳

其帝ノ布告ニ據レ兵船ノ通航ヲ禁スルノ権  
ハ土國ノ未ダ之ヲ拋棄セサルヲ知ル可キノ由  
抑万国公法上ノ適例ヲ以テ日本下ノ関一件ヲ  
辨明スルニ益アリト為サハ千八百六十三年ニ  
於テモ又ハ其他ノ時ニ於テモ外國ノ商船及之  
兵船ノ下ノ関海峡ニ入り或ハ内海ヲ通航スル  
ノ権理ナキト頗ル明白ニシテ而ノ其商船通航  
ヲ許ルサ、ルノ理ハ恰モ猶土耳其ニ於テ特ニ  
其通航ヲ許ルニ條約ヲ結ハサリシ前ト同シノ  
又其兵船通航ヲ許ルサ、ルノ理ハ猶方今現ニ

上耳其ノ之ヲ許ルサ、ルト同一般ナリ蓋シ下  
ノ関一件ニ管係セシ一國ニ於テ泛然其事實ヲ  
解シテ之ニ注意セシハ千八百六十四年一月七  
日ノ英國政府ノ命令書ニ左ノ文詞ヲ載セタル  
ニ曰リ以テ之ヲ知得ル可シ其文ニ曰ク

英國總領事ハ若シ英船ノ日本内海ニ通航ス  
ルカ為メ擾亂暴劇ノ舉動ヲ生セシメ或ハ英  
國臣民ト日本欲君ノ臣民トノ間ノ和親交際  
ヲ害スベシト思ハレバ右通航ヲ限制シ或ハ全  
ク之ヲ禁スル規則ヲ設クルヲ得可シ云云

然レ氏右ニ記スル通航制止ノ權ハ全ク之ヲ認  
聴シ或ハ適宜ニ之ヲ量定シタリト思ハレズ然  
レ氏兵船ハ強テ日本ノ内海ヲ通航スルノ權ナ  
キ旨ハ前文既ニ其確証ヲ示シ又商船(米國商船)  
ニ付テハ之ヲ差押ヘ又然ノミナラス之ヲ奪フ  
ヘキ特別ノ道理アル旨ハ後文更ニ之ヲ辨論ス  
可シ

下ノ関ニ於テ三艘ノ外國船ヲ襲撃シタルノ顛  
末并ニ其後外國人ノ本國ヨリ許容ヲ得サリシ  
處置或ハ一部分其許容ヲ得タル處置(又稀ニハ

全。本國ノ許容ヲ得タル更置アリト思ハルノ  
顛末ハ此書中之ヲ考究ス可シト虽モ先ツ當時  
ニ於ケル日本國ノ政治上ノ景況ヲ畧記スル  
極メテ緊要タレハ左ニ之ヲ約言ス

抑日本ノ主權ハ古來常ニミカドノ掌握スル所  
ナリト虽モ行政統括ノ權ハ數百年來強勢アル  
一臣下ノ施行スル所トナリテ此臣下ハ千八百  
五十六年來外國人等之ヲ稱シテ<sup>狄</sup>君ト云ヒシ  
カ今ヲ去ル<sup>一</sup>二百五十年前ヨリ德川氏ニテ其  
職ヲ世襲シ初メ德川氏ノ祖先ハ日本ノ權勢ヲ

永ク其子孫ニ傳フニ適セント思ヘル制度ヲ  
設ケシカ斯ノ往昔ノ時ニ在テモ後日若シ外國  
人ノ日本ニ其勢ヲ得ル<sup>一</sup>アラハ已レカ子孫ノ  
為メ必ス害アルヘキヲ明カニ預知シ夫ノ荷蘭  
人カ受ケシ如キ嚴密ナル限制アルノ外國人ノ  
外通商ヲ許サレシ歐洲人ナシ全ク外國人ノ通  
商ヲ許サ、ルヲ以テ其子孫ニ遺傳セシ制度ノ  
基本ト為シ米國<sup>コモドール</sup>ベルリ氏カ初メテ  
到着セシ迄ハ此制度依然トシテ常ニ存続セリ  
又此時ニ至ル迄ハ德川氏ノ權柄嘗テ一回ノ危

難ニ罹リシコナク数多ク大名ノ遇スルニ酷烈  
ノ處置ヲ以テセシニ曰リ頗ル不平ノ念ヲ懷カ  
シメタルニ誰在テ此數百年來ノ権柄ニ抗拒セ  
ント為スノ膽カアル者アラサリシカ外國人ノ  
日本ニ來リシヨリ頗ル不平党ノ勢焰ヲ増シ其  
不平党ハ半バハ大君政府ヲ惡ムノ情ニ鼓舞セ  
ラレ半バハ外國人ヲ忌ムノ意ニ奨励セラレ其  
攘夷鎖港ノ念ノ終ニ全國ニ波及シテ報國志ノ  
一徵トナリタルニ無シ外國欽差ノ接待ヲ口実  
トシテ江戸ノ管長ニ種々ニ困メント謀リタリ

然ルニ京都ニ在ルコトカゴノ朝廷ハ原トヨリ攘  
夷ノ謀策ニ管シタルニアラサレハ次第ニ全國  
人民ノ志情ニ浸染シヤルリノ渡來セシヨリ十  
年ノ間專ラ外國人追攘ノ舉ヲ誘導セント謀リ  
タリ而シテ又大ナル大名ハ互ニ相競フノ念熾ナ  
ルヨリ以テシテ其志ヲ同シテ事ヲ謀ル能ハサリ  
シカ其大名ノ中一兩名ハ常ニ必ス大君ヲ覆ヘ  
シ且ツ外夷ヲ追攘スルノ策ヲ京都官吏ト商議  
シ而シテ此二旨ノ主眼ハ時アリテハ相合シ時ア  
リテハ離分セシカ畢竟之レカ為メ嘗テ擅制獨

裁タリシ大君ノ権カモ千八百六十三年ニ至ラ  
サル前ニ頗ル衰弱シテ殆ント挽回ス可カラサ  
ル勢ニ及ヒタリ又大君ノ政府ハ早ク外國交際  
ノ已ムヲ得サルヲ怒メタレ氏如何ニシテ人民  
ノ頑論ニ抵觸セサル様外國ノ交際ヲ聴ルスヘ  
キヤノ良策ヲ考フルニ付キ十二年間江戸執政  
輩ノ智力ヲ尽クサシメ終ニシレカ為メ全ク大  
君政府ノ衰頹ヲ為スニ至レリ依テ千八百六十  
三年ノ初メニ於テハ日本國ノ紀綱幾ント紊乱  
シ大名ハ所々ニ乱ヲ起シ京都ノ帝宮ニ於テ大

君ノ兵ト下ノ閑ニ於テ外國船ニ打掛ケタルノ  
責ニ任スヘキ大名ノ兵ト將ニ戦鬪セント為ス  
勢ニシテ當時徳川氏ノ憂思ト其地位ノ困難ト  
縱令其危急ト言ハサルモ各人ノ明カニ知幾セ  
ル所ニ係リ殊ニ欧亞各國ノ欽差ハ最モ詳カニ  
其事情ヲ解悟シタリ然レ氏其欽差等ハ皆大君  
ニ宛テ委任セラレシ者タレハ當時ニ於テモ常  
ニ大君ヲ以テ日本最高ノ権カヲ握レル者ト看  
做シ其後英國公使ノ書中ニ「余ハ大君ヲ以テ條  
約ヲ結ヘル者ト思做シ敢テ其権カヲ疑ハス依

テ其條約施行ノ責ハ亦大君ニ在リト思フト言  
ヘリ

斯ク日本ノ形勢驗然タルノ際江戸ノ官吏ハ勉  
メテ其憂悶ノ一大原目ヲ除カント欲シ夫ノ敵  
對セル大名輩及々其藩士ノ障碍ヲ防ク為メ自  
國人民ノ權利ヲ限制シタル状態ヲ外國公使ニ  
指示シタルニ外國公使ハ敢テ之ヲ顧ミズ蓋シ  
當時ノ景況ニ於テハ外國公使ノ大君政府ノ言  
ヲ聽カサル可キ一明カニシテ大君政府ハ固ト  
ヨリ其妨害ヲ為ス 原目ヲ全ク除去セント冀

フタルニ其力ノ終ニ此ニ及ハサルヲ悟リタル  
ハ巴ムヲ得ス外國人ノ處置ノ為メ更ニ騷擾ヲ  
好ム日本人ノ暴動ヲ奨励シ終之ニカ為メ恐ル  
ヘキ紛訟ヲ外國トノ間ニ惹出スノ患ヲ未然ニ  
防カント勉メ其意ハ頗ル親切ナリト虽モ能ク  
其志ヲ果スヲ得ス然リ而シテ大君政府ノ官吏若  
シ更ニ政治ノ學術ニ達シタル或ハ外國ノ法  
律相談人ト相謀ルヲ得ハ想フニ其勉ムル所ハ  
敢テ無益タラサル可ク果シテ然ラハ時機ニ後  
レサル中ニ夫ノ内海及々其通路タル海峡ヲ鎖

スノ権アリテ其將ニ起ラントスルヲ預  
知セシ(其後現ニ起リタリ)災害ノ未  
ニ防キ得ヘキヲ曉知シタル可キナリ  
然ルニ外國公使ハ固トヨリ此等ノ  
諸事ヲ大君政府ノ官吏ニ告知スルノ  
職ニアラス又公使輩ノ其後ノ處置  
ヲ自得スルニ就キ之ヲ推考スル時ハ  
恐クハ公使輩モ亦能ク自カラ此等ノ  
諸事ヲ曉知シタルニ非ル可シ

大君家ニ對シ並ニ七君ノ外國ヲ待スル處置ニ  
抵抗スルノ最タル者ハ中長州ノ大名アリ其領  
國ノ一ナル長門ハ日本ノ内海ニ一分臨ミ下ノ  
関ノ瀬戸ノ東岸ナリシガ京都ノ後押挑祭ニ因  
リ自己ノ意ヲ以テ千八百六十三年瀬戸内ノ最  
狭キ場所ニ臨ミ砲台ヲ海岸ニ築建テ又通船ヲ  
攻撃スル際砲台ニ應援スル為メニ最便利ナル  
處ヘ砲船ヲ置キケリ然レトモ其初念ハ唯外國  
船ノ内海ニ入ルヲ拒ムタケノ事ト見ヘ真ニ發  
砲スル前ニ空砲ヲ放ケケル者六月二十五日ノ

午後アメリカノ小蒸氣商船ベムブローク号横濱ヨリ長崎ニ到ル途中瀬戸ノ中央下ノ関町ノ近ニ碇ヲ投ヤシニ右ノ砲台ヨリ發砲シタルトモ翌朝一時頃マテハ此船ニ對シテハ發ヤザリシ此時ニ至リ長州ノ船ニ隻來リ襲ビケル故ベムブローク船ハ直ニ南走シ豊後灘ヲ經テ無難ニ遁去シ敵亦之ヲ追ハザリケリ  
此事ノ報告七月十一日江戸ニ達シ直ニ當時横濱ニ在リタル米國公使ミストルブリュウエンニ斯クト傳ヘケレ  
公使十二日ニ神奈川奉行

ハ書ヲ贈リベムブローク船主ヨリ出シタル損失ノ廣ト米國々旗ニ對シ發砲シタル無礼ヲ責メ其償金贖罪金ヲ要求ヤリ  
ベムブローク船主ノ損害ヲ償ハシテ請フノ廣甚シ輕シ頗ル怪ムヘキナリ其書左ノ如シ七月十九日内海ニテヤンブローク船日本ノ國旗ヲ建テタル砲船ノ為ニ襲撃ニ過ヒ其損耗スル所左ニ列載ス  
不知案内ノ迂路ヲ經テ大洋ニ出ツルカ為ニ時日ヲ費ヤシ一日三百弗ニシテ五日合セテ



千五百弗

目指ヌ所ノ長崎ニ到ル能ハサルカ為ニ積荷

及ヒ旅客ノ損六千五百弗

危難ノ節ノ慰勞トシテ船中役人水夫ニ與フ

ル金二千弗

右總高一万弗也

右ノ談判ノ後公使直ニ當時横濱港ニ在リタル

米國官船ワイヲミニ号ノ船將マクドウガルト

議シケルニ船將直ニ瀬戸ニ到リ襲撃ヲ為シタ

ル二隻ノ船ヲ取押ノ事ニヨレハ之ヲ破却セシ

ト決シケレハ公使六ニ悦ビケリ

十三日ニワイヲミニ船横濱ヲ發シ十六日下ノ

関ニ到リ漸ク近ツタトキ長州ニテ砲ヲ發スレ

トモ我船ニ向ケテ發マサリ此時長州ノ船三

隻碇泊シテ居ルヲ見シ故ニ之ヲ目掛ケテ勇進

シ是ニ於テ戦闘初マリワイヲミン船ハ此三隻

ノ船ト並ニ數ヶ所ノ砲台ヨリ砲撃セラレタレ

トモ終ニブリグ形ノ船一隻ヲ擊沈メ蒸氣船一

隻ノ罐ヲ擊破リ敵ノ死傷ハ詳ニ知ルヘカラサ

レトモワイヲミン船ニテハ死者五人傷者六人

ニシテ二十日横濱ニ歸レリ  
七月二十四日米國政府へ此事ヲ報スルトキ公  
使唯「ペムブローク」船長崎へ到ル途中ニテトノ  
ミ記シ此船ノ下ノ関ニ到リタル委曲ヲ説カサ  
リケルカ公使ノ遣ハシタル官吏ノ口供ニ「此船  
ハ横濱ヨリ内海ヲ通り長崎ヲ經テ上海ニ到ル  
トアリ是ニ於テ横濱ヨリ長崎ニ到ルニ内海ヲ  
通ルハ迂路ニ非サル」明ナリシガ公使其船ノ  
挙動ヲ詳悉ニ取糺シタリトモ見ヘス然レトモ  
此事ヲ篤ト取調ヘタル役所ノ書物ニ據レハ其

船ハ恐ラクハ交易ニ為ニ下ノ関町ト商議セシ  
ト為ニタル者ニシテ然ルトキハ政府ノ擁護ヲ  
賴ム能ハサルノ理アリミストル、ウム、ビーテ、ラ  
ウレンシ、其著ス所ノコムマシテール、シユール、  
リストワール、デ、プログレ、ド、ゴド、ワ、デ、ジャン、  
萬國交際法進ト題スル書中ニ日本ト外國ノ交  
渉記畧ノ義ト題スル書中ニ日本ト外國ノ交  
際ヲ論シ下ノ関一條ニ就キ言フ所左ノ如シ曰  
「アメリカ船戦ヲ開キタル仔細ヲ尋ヌルニ日本  
ノ一大名ニ屬スル船アメリカノ蒸氣商船ヲ砲  
撃シタルヲ名トシ千八百六十三年七月ニ米國

軍艦日本ノ軍艦ヲ攻撃シテ之ヲ沈メタリ斯ク  
報復ヲ為シタルハ蓋シマメリカ船將ノ精細ナ  
ル報知ヲ待ツス右ノ處置ニ及ヒシニ在リテ其  
撃沈メラレタルト思ヒソル彼蒸氣商船ハ其突  
少シモ損害セラレガリシナリ而シテ又其船ハ交  
易ヲ為ス可カラサル海中ニ在リシ一亦分明ニ  
知レタリト

七月八日カ九日ノ事ニテフランシスノゴンボ  
ト船キンサン号瀬戸ニ碇泊セシ時又砲撃セラ  
レテ大ニ害ヲ被レリ其知ラセ十五日ニ横濱ニ

達シ十六日フリゲイト形セミラミ船トゴンボ  
トト、タンコレト船ノ二隻リールアドミラル、ジャ  
ールノ手ニ属シ報復ノ為ニ出帆シケルガ其船  
砲台ニ逃ツク時長州ニテ砲ヲ發シケレトモ例  
ノ如ク直ニ船ニ向テハ發セサリシ而シテ船ト  
船トノ戦争ハ暫時ニシテ止ミ一處ノ砲台モ砲  
手數人死シテ忽チ發砲ヲ止メタリ是ニ於テ二  
百五十人上陸シ小戦アリテ日本人二十人許  
銃劔ニテ斃シ砲台ノ大砲ニ釘ヲ打テ砲車ヲ燒  
却シ彈藥ヲ棄擲シ逃處ノ一村ヲ燒キ殺戮スル

所頗ル多シフランス方ニテハ傷者三人アリ  
オランダノ軍艦メデユサ船七月九日長崎ヲ發  
シ瀬戸内海ヲ經テ横濱ニ到ラントスル途中ニ  
テキンサン船ニ遇ヒ下ノ関ニ大砲ヲ備ヘ外國  
船ト見レハ砲撃スヘキヲ聞キケルガメデユ  
サ船初志ヲ變セテ進ミテ險難ノ場所ニ近ツキ  
ケル時例ノ如ク空砲ノ警アリメデユサ船構ハ  
ス進ミシ故長州ノ二船ト砲台ヨリ之ヲ砲撃ス  
メデユサ船之ニ應シテ砲ヲ関キ一砲台ヲ撃テ  
スクメ敵船ヲモ發放スル能ハサラシメタリ敵

ノ死傷知ルヘカラスメデユサ船ニテハ士官水  
夫ノ中死者四人傷者五人ナリ  
ペンブローク船キンサン船メデユサ船ノ三艘  
ハ稍相似シル乱坊ニ遇ヒメ<sup>者</sup>ナルガ最初ノキ  
ンブローク船ノ申分ハ米國政府ニテ其所在ニ  
就キ問届ケサル所アリ又他ノ二隻ノ申分ハ歐  
洲各國ノ公法ニ及スル所アリケレトモ暫ク此  
ケ條ヲ差置キ此二隻ノ蒙リタル害ハ既ニ其場  
ニ直ニ十分返報シタルヲ明ナリ<sup>但</sup>メデユサ船ノ  
彼ヲ害シタル所詳ナラサレトモ少クモ其船ニ

テ死傷シタルト同様ニハ敵ヲ殺傷シタルト見  
テ可ナリ扱ミストルプリユウエシガ外國奉行  
ヘ送リタル書中ニワイヲミン船ノ旅行ヲ記シ  
此船砲撃ニ過ビケレトモ一発ノ彼ヲ怒ラシム  
ルトテ為サマ請フ此船並ニベンブロク船ノ  
蒙リタル耻辱ト損害ノ償ヲ得ントイヘルハ不  
審ナリ

ワイヲミン船ノ政府ノ命ヲ得スシテ戦争ノ舉  
ニ及バンカ為ニ出帆セント決シタル儀ニ付テ  
ハ少クモ其事ニ慮スルノ方智ナシト謂フ歟リ

ヲ免ルヘカラス又フランスノ攻撃シタルハ日  
本人ヨリ戦ヲ初メタルニ非スセミラミ船ヨリ  
先ツ砲發セシナリ

右ノ事皆一月間ニアリシナリ而シテイギリス  
船ハ前後曾テ砲撃ニ過ハカリシト殊ニ不審ナ  
ルヘシイギリス役人ノ此事ニ關係シタルハ唯  
イギリス官船コックテノ船將カウバルガフラン  
スノ船將ジャラント高義シ叶ハマトキハ其後ケ  
テ貸サントテ一己ノ意ニテ申シ送リタル一事  
ノミニシテ其國人ニ關係アルカ為ニ公然義ヲ

表スル戦争ニ加勢セント申送りテ実ニ一隻ノ  
船ヲ遣レリ然レトモ若シ其コケツテ船砲撃セ  
ラレナハイギリスノ代理公使モ條約國三ヶ國  
ノ國旗ニ對シテ不法ヲ為シ恥辱ヲ受ケタル列  
ニ加ハリタル由ヲ直ニ記シタランニイギリス  
ノ軍艦戦争ノ時ニ到着セスカラ合セ攻撃スル  
ニ至ラサリケリ然ルニイギリス船モ外ノ三國  
ノ船同様ニ砲撃セラレタリト一般ニ思ヒ今日  
ニ至テモ多少其説アリ是レ多クハ日本在留ノ  
イギリス公使等ノ切ニ此議論ニ加ハリタルニ

因ニナルガ其説ノ私ク行ハレタル證據ニハ千  
八百六十三年十月三日ミニストル、プリエウエ  
ンヘ送リタルミストルセワルドノ書ニ判然イ  
ギリス商船ニ對シ砲撃シタルトイフ句アリ  
外國公使等此機ニ乘シテ政府ニ迫リ更ニ一層  
國ヲ開カシメントテ七月二十五日會議ヲ催シ  
テ日本ト取結ヒタル條約面ニ載スル所ノ推義  
ヲ傷テサラントスルニハ直ニ再タヒ内海ヲ開  
カシムヘク又此海路ヲ自由ニ通船セントスル  
ニハ海陸兩兵ノカヲ並用ビサルヘカラスト決

シケリ蓋シ後ニ本國受府ノ此見込ニナルヘキ  
トイフコト未タ知ラスシテ此議ニ決シタルハ  
固ヨリ言フテ候タス是レ即チ後ニ四改府ヨリ  
出テ宣告指揮シタルニ非スシテ唯其公使等自  
己ノ意ヲ以テ起シタル一戦ト為ルノ前兆ナリ  
シ扱其決議シタル所ヲ日本受府ニ告クルニ其  
頃常習トナリタル強壓ノ言ヲ以テセリ此事當  
時之ヲ為シタル人等ニハ適當ニシテ必要ト見  
エタルナランナレトモ今日ヨリ之ヲ見ニ公平  
ニ考フレハ必要トモ良策トモ謂フヲ得サルナ

リ七月二十三日江戸ノ役人ト外國公使ト會セ  
シ時日本ノ執政謂ヘルニハ「大君ハ固ヨリ長州  
ノ大名ノ為セル如キ所業ヲ善ミセス」ト二十八  
日ニイキリスノ代理公使書ヲ日本役人ニ送り  
乱妨無法ノ企ニ大君ヲ一味シテ暴動ヲ為セシ  
メ盟誓ノ條約ヲ破ラントスルヲ責メ且ツイフ  
大君宜ク速ニ下ノ關ノ砲台ヲ敗ツヘシ猶豫ア  
ルヘカラス又ペンブローク船襲撃セテレテヨ  
リ既ニ三十日ヲ経若シ大君カアレハ此日數ノ  
間ニハ彼乱妨ヲナシタル大名ヲ執ラフルト出

来ヘキ筈ナリトイヒタリ其書実ニ言フ所放恣  
論スル所條理不明ナリ何者大君ハ長州ヲ制止  
スルカアラサルヘシトイヒナカラ猶豫スルヲ  
許サストイフハ甚タ無理ナリ又三十日間ニハ  
彼大名ヲ取押ユルノ機アリトイヒシナレトモ  
実ハペンブローク船ノ一條江戸ニ知レタル後  
僅ニ十七日ヲ経タルノミ元来イギリス代理公  
使ハ能ク大君政府ノ此時大ニ混雜シタルヲ知  
リ又其主ハ國ノ重事ニ就キ京都ニ駐リ又彼反  
逆ヲ謀ル大名ノ為ニ其一身ノ安危一家ノ存亡

モ計ルヘカラサルノ秋ナルヲ知リナカラ上ノ  
如キ言ヲ發セシナリミストルアリエウエンモ  
イギリス代理公使ニ勝ラス劣ラス當時ノ事情  
ヲ熟知シナガラ政府ノ自ラ長州ヲ罪スル能ハ  
サルヲ責メ七月二十日受府へ出シタル書ニ當  
時政府ノ兵ハ盡ク大君殿下ヲ守護スルニ入用  
ナレハ長州ノ罪ヲ正サハルヲ疑ヒナシトイヘ  
リ江戸ノ閣老ハ事勢ノ困難ナルヲ蔽ハントセ  
ス必ス長州ノ處置ヲ為スヘシト約シテ但其用  
意ヲ為ス時間ヲ待テナイヲ求メケル然ルニ外



國公使等ノ掛合ハ自ラ矛盾シ政府ノ直ニ之ヲ  
處置スルカナシト知リナカラ暴ニ是非急ニ之  
ヲ為セト迫ル一尤怪ムヘキナリ二十九日ニミ  
ストル、アリエウエン書ヲ送レリ其文ニ「閣下等  
必ス一日ノ猶豫モナラサルト思ハサルヘカ  
ラストアリエウエンハ其同役等ト共ニ外國人  
ノ儀ニ就テ踏ミ行クヘキ路筋ハ萬端日本人ニ  
教エント自ラ任シ且ツ請合テ其内國事務ニ處  
置マテニ就テモ說法ヲ為シタリ今日ニ至ルマ  
テ政亞ノ公使等仍此請合ノ調子ヲ帶フ此等ノ

掛合書ヲ一見スレハ和親條約國或ハ永  
ク和親ノ交ヲ全クセント欲スル國へ對  
シ歐洲各國ニテ此ノ如キノ言ヲ發シタ  
ルコト未ダ曾テ見サル所ナリ日本ノ弱  
キト別ニ其國ノ存亡ニ関ハル内亂アルト  
ニテ此等ノ事皆無事ニ濟ミシナリ今  
日トテモ猶其國力割ニ徵ナルヲ以テ無  
事平易ニ行クノミ其嘗テ公然之ヲ擯レ  
コトナク今モ亦憤ラサレトモ又曾テ  
之ヲ忘ル、一トナ、今後マテモ忘レサル

ヘク又決シテ忘ル、<sup>策</sup>ナカラシ  
政府ヨリ書ト言トヲ以テ四ヶ國ノ公使ニ書<sup>謝</sup>シ  
イビケルハ信ヲ守リ盟ヲ渝<sup>テ</sup>サルヘケレ  
トモ我<sup>果</sup>シテ心ノ<sup>終</sup>ニ條約面ノ義務ヲ  
尽ス能ハサラシム者ハ他ナシ國事紛  
乱スルニ因<sup>レ</sup>トテ其求ムル所ハ時日ヲ緩  
クスルニ在リ大君ハ其家ノ舊威將ニ傾  
カントスルヲ以テ奮激シテ之ヲ支ユ<sup>レ</sup>  
遑ナシ其威ノ傾クハ外國人ヲ國ニ入  
レタルカ為ナレトモ然レトモ勉メテ其

外國人ニ盟ヒタル所ヲ行ハントシタルヲ明ナ  
リ蓋シ大君ハ御門ノ臣タルニ曰テ御門ノ朝廷  
ヨリ攘夷ノ命出ツレハ之ヲ奉シテ之ヲ顧ミサ  
ルカ如ク為スヘカラス故ニ御門ト大名ノ間ニ  
立テ止ムヲ得ス其主ノ意見ヲ大名ニ傳ヘ之  
ヲ國中ニ公告セサルヘカラサリシ然レモ又大  
君<sup>大</sup>君ノ真意ヲ兼ル者ハ全國平安ノ為ニ斯ク  
ナケレハナラヌトイフ大君ノ意見ヲ人ニ知ラ  
セ先中等ハ外國公使等ニ對シ其主ハ京都ニテ  
一時止ムヲ得ス時勢ニ隨フト虽モ後ニ至ノ

必ス主ノ意ノ正義ナリト表スルヲアラント  
告ケ、リ是ニ於テイキリス代理公使トアメ  
カノ公使此旨ヲ本國ニ報シ其文之ヲ信スルノ  
模様見ヘサリケレハ今日ニ至テハ此旨ノ信偽  
問ハスシテ知ルヘキノミ千八百七十一年イギ  
リス代理公使タリシミストル、フ、アダムスハ  
誰一人トシテ攘夷ノ意アリト責ムル者ナキ人  
ナルガ其近來ノ著書(日本史)ニ記スル所ヲ見ル  
ニ曰余惟フニ「止ム」ヲ得マシテ御門ノ攘夷令  
ヲ公使等ニ傳フト、虽モ其令實ハ廢物ニ同シト

將軍ノ老中等ガイニタルハ虚言ニ非サリシ  
今ニ至テ明ナリト又將軍派ノ者数月間議論ヲ  
為シ戦争ヲ為シテ頑固ナル長州ノ大名ニ御門  
ノ不興ヲ蒙ラセタルヲ犯スルノ後ニ於テ左  
ノ文アリ曰千八百六十三年ハ此ノ如クニシテ  
終リシガ外國人ニ對シテノ處置ニ就キ幕府ノ  
良キ評議行ハレントスル模様アリ日本ノ記者  
ノ嘆スルヲ如ク此時ヨリ攘夷論跡ヲ滅シ水ノ  
春日ニ融ケルガ如クナリ  
千八百六十三年九月ニストル、アリユウエンヤ

ムブローク船ノ償金也。テ日本人ノ拂ハント約  
シテ但延期ヲ求メシヲ更ニ請求シケリ。當時江  
戸ノ金庫ハ戦争用意ニ就キ離レ難キ入費トイ  
ギリスニ拂フ別ノ償金トニテ大ニ疲弊シタル  
トハ言フマテモナキ事ナリ。然ルニミストル、ブ  
リュウエン又更ニワイヲミン船ノ事ヲ持出シ  
且ツ此船ハ有無ノ報知モナク出放ケニ砲撃ニ  
遇ヒタルトイフ。皆茶ヲ言立テ國旗ニ對シテノ  
無礼ニ就テハ償金ヲ求メント欲セサントモ死  
者ノ眷族及ニ傷者ノ撫育金ニ為スヘキ金額ヲ

與フルナレハ我友誼ト義廉ヲ証セン。為ニ此一  
茶ノ事ハ全ク自ラ引請ケテ皆済ニ為スヘシト  
イヘリ。抑此死傷者ハワイヲミン船ガ日本人ヲ  
無理ニ押ヘンカ為メ横濱ヨリ出帆シテ下ノ関  
ニテ戦ヒタルヨリ起リタルトテ贖者忘ル、勿  
レ故ニ日本ノ役人之ニ對ヘテ政府ニテハ彼不  
法ノ所業ハ既ニ其者ニ罪過ヲ申付タルニテ全  
ク済ミタルトト為ス別ニ引請テ貰フニ及ハス  
ト謂ヒタルハ尤至極ナリケリ。是ニ於テ数月間  
其事ノ議止ミケレトモミストル、ブリュウエン

ハ新ニアメリカ人ノ受ケタル害ノ償ヲ要求ス  
ル為ニ頻ニ政府へ迫リケリ其掛合ノ間ニ稀  
代ナル説ヲ述フ表ニハ之ヲ以テ合衆國政府ノ  
方ハ已一身ニテ引指タルカ如シ曰外國人ノ為  
ニ日本人ノ欺カル、<sup>一</sup>其例甚タ多シ故ニ條約  
國ノ游民等ノ模様ヲ見テモ後害ノ恐レアル故  
惣テ其國人ノ為シタル事ハ其政府責ニ任スル  
トイフ道理ヲ確定スルヲ以テ今日ニ當テノ萬  
全ノ策ト為スヘシト思ハルト然レトモ長州一  
途ノ為ニ大君其責ニ任シタルヲ以テ此等ノ事

ハ日本老中ノ心ニ止マラサリシト見ヘタリ  
千八百六十四年三月シユル、ルゼルホルド、ア、  
ルコツク再タニ日本ニ来リコロ子ル、ニールハ  
代理ノ職ヲ免セラレタリ此時ヨリシテイギリス  
ス公使館役前ト一変シ不法ノ大名ヲ嚴重ニ處  
置スヘシト頻ニ陳述シケリシユル、セルホルド  
ハ下ノ関ノ砲台ヲ毀ツ為ニ勢強キ兵ヲ備ヘシ  
ト欲スルノ意コロ子ル、ニールニ比スレハ更ニ  
鋭ケレトモ其主意同シカラスコロ子ル、ニール  
カ最後ノ三月一日附ノ書翰ニハ「通路スヘキノ

理ヲ立ツル為メニ非サレハ余ハ彼ノ一時ノ妨  
碍ヲ以テ我此國ノ交易或ハ航海ニ害アリトハ  
覺ヘストイヘリ此文ノ意曖昧不明ナル氏記者  
ノ意全ノ知ルヘカラサルニ非ス蓋シ「言フカ如  
キ害ハ之ヲ知ラス再タク瀬戸ヲ開クモ何モノ  
主意ニ非サレハ無益ニ屬スト言ハント欲スル  
ナリ之ニ反シテシユル、ルゼルホルドハ直ニ砲  
台ヲ其終ニ置クヲ以テ此國ノ外國交易ヲ廢ス  
ルニ至ル源ナリト為セリ且ツ前ニモ記シタル  
如クイギリス船ハ曾テ襲撃ニ過ハサレトモ其

初メテ本國政府へ贈ル書中ニ深ク日本人ノ差  
別ナク諸外國ノ船ヲ砲撃スルヲ咎メタリ抑東  
方ノ公使等ハ其懷抱ニアル望ヲ遂ケントスル  
ニ方リ兎角事實ニノミ拘泥シタルナラン一考  
フルマテモナク明ニシテ下ノ關係向ノ仕組ハ  
シユル、ルゼルホルドノ功名ヲ求ムル一大眼目  
タリシ事當時ノ政事ニ關係シタル書附類ヲ荒  
山人ハ能ク知ル所ナリコロ子ルニールハ魔島  
攻撃ト日本ヨリ莫大ノ金ヲ取奉ケタルニ目テ  
本國ニテ頗ル名ヲ得タリシナレトモ共ニ羨

ムヘキ事ニ非ス然ルニ新ニ再タク来リタル公使モ亦同様ノ虚誉ヲ得ント欲スルカ如シ蓋シ其下ノ関ノ事ヲ企テ心ヲ此ニ留メタリシトハ其本國人ノ能ク知ル所ナリ

アダム氏云フ是時シヤ、アール、アール、コック以テ為テク攻撃ヲ行フベキノ時節到来セリト乃チ英公使ハ其同僚ト通信シ是時ヲ失ナハスノ事ヲ一決セントセリト實ニ今度ハ好機會ニシテ向キニ鹿兒島ノ事件ノタメニ徵召シタル船隊ハ非常ニ大ニシテ尚ホ日本海ニ碇泊シタリ是

時ニ當リテ大君政府ノ困難ハ常ノ如クニシテ別ニ名策ナク只議論ヲ述フル而已而メアールコック同僚ノ公使等モ此度ノ舉ニ異議ナク又必シモ一々本國政府ト相謀ルヲ要セズ依テ記録ニ載スル所ヲ見ルニ當時本國政府其事情ヲ全ク知ラサル者二國アリシト云フ即チ其一國合衆國ニテセウアルド氏ハ初メ何船ノ攻撃セラレシヤ之ヲ知ラサリシ由ハ既ニ上文ニ述タルカ如シ又一國フランスニテハ千八百六十四年五月ニヅメル井ド、ル井氏トパリ派出ノ





ビタレ氏本國政府ノ意ハ彼レノ希望スル所ト  
全ク異リテ彼レノ公文ヲ忌嫌フ事ノ甚シキ迄  
來公文ニハ稀ナル所ナリト云フ蓋シリエセル  
ホルドノ公文ハ其議論ヲ巧ニシ其文章ヲ華ニ  
シタリト虫モ畢竟惡口誹謗ニ涉リテ日本人ハ  
政府トナク人民トナク之ヲ哀憐スルノ情ナク  
日本人ノ名譽正直信義英氣等皆之ヲ揚ケズシ  
テ一概ニ之ヲ誹謗シ其不幸ヲ憐レムノ情ナク  
其内乱ノ如キハ外國人入港ニ由テ起ルモノナ  
レ氏之ヲ以テ嘲哂ノ具トナシ其到着ノ時ヨリ

千八百六十四年ニ至ルマテ其間之ヲ譏評スル  
一止マズ或ハ奸計ニ出テ或ハ徒ニ殘害ヲ加ヘ  
ントスルニ由レリ而メ其行狀ヲ畧論スレハ政  
府ノ困難ニシテ滅亡セントスルモノニ來リテ  
和平ヲ致スノ使者ニシテ動モスレハ覆滅ノ計  
ヲ思ヒ付キ熱心ニ之ヲ行ハントシ自ラ以為ラ  
ク前後左右ニ在ル所ノ人皆恐ルニアラス已  
レ一人全權ニシテ裁判スルノ智慧アリ褒貶ス  
ルノ權アリ又戰爭ノ難ヲ以テ一國ニ蒙ラシム  
ルノ力アリト

借其結局ハ其勉強シテ希望セシ所ノ如クナリ  
シヤ否今下ニ其如何ヲ見ルベシ

七月二十六日英國外務卿アールリユセルヨリ  
シヤ、リユセルホルド、アールコツクニ書面ヲ送  
テ曰ク近コロ領取シタル書翰ノ返答トシテ貴  
下ニ言フベキ事アリ女王陛下ノ政府ヨリ貴下  
ニ嚴命ス慎ンテ日本ノ内部ニ於テ戦争ヲ行フ  
ベカラス且ツ日本政府并ニ諸侯ニ對スル敵對  
ノ処置ハタトビ海軍ニ限ルトモ防禦ノタメニ  
止ムヲ得ザルニアラザレハ決シテ之ヲ為スミ

カラズ且ツ去ル第一月七日女王陛下ノ勅命ヲ  
以テ貴下ニ委託シタル權アリ即チ英國船ノ日  
本ノ海峡或ハ河海ニ進入シ或ハ通行スル事若  
シ由テ暴乱ノ処置ヲ致スベキノ恐レアリ或ハ  
女王陛下ノ臣民ト日本大君ノ臣民トノ間ニ和  
誼ヲ保存スルニ害アルベキトキハ其進入通行  
ヲ禁シ之ヲ整理シ或ハ拘束ヲ加フベシト全權  
ヲ委託シタリ依テ望ムラクハ英國船害ヲ蒙ル  
トモ敵對ノ処置ヲゼスシテ乃チ穩カニ伸寬ノ  
方法ヲ用ユル貴下ノ勉勵ニアラント

此書面ハ合衆國、フランス、ランダ三國ノ政府ニ其寫シテ通達シ英國ノ説ヲ誤解セシテ防キタリ又八月ノ八日ニアールリユセルヨリシヤリユセルホルド、アールゴツクニ書翰ヲ送り日本ニ於ケル事情ヲ説明<sup>カセ</sup>シメ且ツ其処置ハ女王陛下ノ政府ト相謀ルベシト命シ且ツ曰ク内海通行ノ事ハ大坂未タ開ケズ御門尚ホ京都ニ在ルノ間何故ニ外國貿易ノタメニ必用ナルヤ甚タ解セサル所ナリト

八月十八日アールリユセルヨリ書翰ヲ送リテ

云フ近コロ貴下ヨリノ書翰ヲ披キ又他ノ確報ヲ聞クニ外國船内海通行ノ節長門侯ノ臺場并ニ兵隊ヨリ害ヲ加ヘタルハ事フランス、ランダ合衆國三國ノ政府ニ關係アリフランス政府ハ長門侯ノ臣下并ニ兵隊ニ罰ヲ加ヘテ之ヲ以テ其意ヲ満足シタリト只ランダノ公使并ニランダ政府ハ女王陛下ノ海軍ノ内海ニ進入シテ事ヲ叢セシテ希望セリト且ツ予ヲ以テ之ヲ見ルニ内海航行ノ事ハ京都大坂ヲ鎖シ外國人ヲ入ラシメサル間ハエフロツバアメリカ

西洲ノ交易ノタメニ必用ニテフランス右ノ事情ノ  
アルニ由テ女王陛下ノ説ニテハ海軍都督ク  
ペルヲシテ長門侯ニ向ヒ戦争ヲ行ハシメズト  
又終ニ八月二十五日ニリユセルヨリ書翰ヲ送  
リテ云フ貴下歸國ノ用意ヲ為スノ前先ツ日本  
政府ニハ休暇ヲ得テ英國ニ趣キ留守中領事官  
ウ井ンチエストールヲ以テ代理公使トナスト通  
達スベシ且ツ同氏ニ其事務ヲ委託スルトキ強  
ク之ヲ戒メテ罪ヲ閑クノ処置ヲナサシムベカ  
ラズト

右ノ書翰一モ期ニ届テ其難ヲ止メタルモノナ  
シ若シ第一ノ書翰ヲ送ル一三日早カリシナラ  
ハ其戦争モ決シテ無カリシナルベシ何ニナレ  
ハ英ノ船隊ノ大ナル一ハ他國ノ船ヲ皆合併シ  
タルヨリモ多ク若シ英ノ船隊ノ共ニ勸クニア  
ラザレハ勝利モ覺東ナク遂ニ其舉ヲ中絶スル  
ニ及ブヘキナレバナリ  
當時フランス公使ノ處置ヲ畧説セシニド、ペ  
ルクトル氏ハ初ノ會議ノ時大ニ助言セシカ五  
月ニ至リレオン、ロセス之ニ代リテ公使トナリ

己レハ其任ヲ免カレタリ惜ロセス氏ハ全ク日  
本ノ事情ヲ知ラス<sup>レ</sup>依テ久シク在留セル者  
公使ノ行フ処ニ<sup>改</sup>働フヲ以テ可トセリロセスノ  
此處置果シテ是ナルヤ否未タ其議論決セズ思  
フニ本國政府ノ見込ト合ハス又其事件ニ付テ  
ハフ<sup>ラ</sup>フランスノ外務省ト日本在留ノ公使ト談判  
行届カサルガ如シ又ヅルー<sup>ン</sup>ド、リ<sup>ン</sup>ス氏ノ  
下ノ関海峡ニ関係スル事情ニ暗カリシイハ既  
ニ上文ニ記シタリ又記録ニ據テ考フルニロセ  
ス氏横濱ニ在テ英國公使ノ計畧ヲ祢贊シテ之

ヲ助ケルノ時ニ方リパリスニ在ル尚書ハ八月  
十二日附ケノ書翰ニ<sup>ア</sup>ール、<sup>コ</sup>ーレイニ請合フ  
テ曰ク述コロノ書翰ニ<sup>扱</sup>ルニオ<sup>ラ</sup>ンタ合衆國  
兩國ノ公使ハカラ以テシヤ、<sup>ア</sup>ール、<sup>コ</sup>ツ  
クヲ助ケ又フランスノ公使ハ其道ヲ以テ之ヲ  
助ス<sup>ク</sup>蓋シ本國政府ヨリ公使ヘノ訓條ニ<sup>フ</sup>ラ  
ンスノ國益ヲ保護スルノ外決シテ戦争ヲ為ス  
ベカラズト禁シタレハナリト是ニ由テ考フレ  
ハフ<sup>ラ</sup>フランスノ公使自ラ事ヲ<sup>癸</sup>シ戦争ヲ為スヲ  
禁セラレタルハ英國公使ニ於ケルカ如シ

爰ニ又フランスノ此舉ニ預カリタルニ付キ一  
ヶ條ノ言フベキ事アリ即チ千八百六十四年ノ  
夏中ニ日本ノ大使パリヌニ到リ兩國政府ノ間  
ノ此レ彼レノ議論ヲ決セントシ遂ニ條約ヲ取  
結ヒ之ヲ夫ノ千八百五十八年條約中ニ入ルベ  
キモノト見做シタリ其條約ノ上ニヶ條ノ左ノ  
如シ

一千八百六十三年七月長門ノ國ニ於テフラン  
スノ官船キアンサン号ニ大砲ヲ打掛タル敵  
對ノ処置ノ害ヲ償ハン為メニ日本政府約シ

テ曰ク大君ノ大使日本歸國後三月ノ中ニ江  
都在留フランス公使ヘ償金トシテメキシコ  
洋銀十四萬元ヲ渡スベシ但シ中十萬元ハ政  
府自ラ之ヲ出ダシ残り四萬元ハ長門ノ國ノ  
役所ヨリ之ヲ出ダスベシ

一日本政府又約シテ曰ク大君ノ大使日本歸國  
三ヶ月ノ中ニ夫ノ下ノ関通行ノフランス船  
ノ妨害ニ遇フヲ除キ且ツ常ニ其通行ヲ自由  
ニナシ事實止ムヲ得サルトキハ兵力ヲ用ヒ  
フランス船隊ノ指揮官トカヲ合セテ之ヲ処

置スベシ

皆此大使ノ日本ニ歸國セシハ八月ノ十九日ニ  
テ又合併ノ船隊ノ出帆ハ同月二十日ヲ以テ兼  
テ其期日ト定メタリ然ルニ今度取結ヒノ條約  
ノ模様ヲ聞キ四ヶ國ノ公使ハ姑ラク事ヲ延引  
シテ日本ノ果シテ其約ヲ踐ムヤ否ヲ待タント  
一決シタリ然ルニ此延引ハ全ク徒トナリタリ  
プルー井ン氏ヨリセウアルト氏ヘノ書翰ニ言  
ヘル事アリ使節ノ約シタル事件ハ大君ノ許可  
スル所ニアラス若シ大君之ヲ許可スルトキハ

内乱ヲシテ益增長セシムベシ且ツ之ヲ許可ス  
ルモ之ヲ行フヲ得ベカラズト果シテ此言ノ如  
シ日本政府償金ヲ出ダス事ハ其理ナキヲ知レ  
ル其大使ノ約スル所ヲ踐マントセシカ夫ノ時  
ヲ極メテ其間ニ下関海峡ヲ開ク事ハ之ヲ成シ  
難シト通達シタリ蓋シ此時ニ當リ大君ノ兵隊  
ハ皆内部ニ在テ長州勢ト戦争ヲ務メタリ依テ  
タトヒ軍艦兵士餘リアリテ其下関海峡ニ向ク  
ルヲ得ルモ元來諸侯ノ中長州ト同意ノ者アル  
ヲ以テ其大君ニ敵對センレヲ恐レタリ其頃又

日本ノ大臣ヨリ外國人ノ疑問ニ答ヘテ書翰ヲ  
送レリ其言ニ曰ク夫ノ條約ノ趣キヲ行フトト  
ハ必ス内乱ヲ引起コシテ兩國ノ交誼ヲ破ルニ  
至ルベシト蓋シ此ニ兩國ハフランス日本兩國  
ヲ云フナリ又外國人ニ通達シテ曰ク大使ノ為  
ス所ハ政府ヨリノ訓條ノ外ニ出デタリ而メ其  
所置元ト好意ニ出ツト虽モ夫ノ一事ハ之ヲ許  
認スルヲ能ハスト予思フニ今日日本大使ノ誤謬  
ノ如キハ内乱ノ歴史ヲ按スルニ其例ナシトセ  
ズ合衆國ニ於テリンコルンノ大統領タリシト

キ外務卿ヨリノ布告ハ當時ノ戦争ハ二ヶ月ニ  
シテ畢ルベシトアリシテ實ハ四年ヲ越ヘタリ  
是レ諸人ノ能ク知ル所ナリ今大君ノ下関海峡  
ヲ領スルノ難キハ従前合衆國ノ政府ニ於テセ  
ウアルド氏ノ所謂六十日ヲ期限トメ南部ノ諸  
港ヲ関クノ難キト同シ是ニ於テパリスノ條約  
ハ全ク大使ノ誤リトナリテ其事畢リタリ是時  
フランス本國政府ノ意蓋シ穩カニ其事ヲ処置  
シ專ラ談判ヲ以テシテ遽カニ戦争ヲセサルニ  
在ルモ燕ク知ラレタリ然ルトキハロセス氏ハ



戦争ヲ恐ルメズシテ其激論ヲ張ル公使等ヲ説キ  
テ事ヲ廢セシムベキ筈アリ然ルニ本國政府  
ヨリノ訓條ニ(フランス外務省ノ本意ニ知ラサ  
レ氏其功ナクシテフランスノ軍艦三艘他國ノ  
船ト共ニ出帆セルトキニロセス氏ハ之ヲ許シ  
タリ

合衆國ノ公使ハ千八百六十四年八月一日頃約  
定書ヲ請取リタリ其文言ハ自ラ差圖シタル所  
ニシテ其趣意ハ九月五日ペンブローク船ノ事  
件ニ付キ元金利足トシテ一萬二千弗ヲ拂フミ

キ事ナリ借政府ヨリ一通ノ證書ヲ公使ニ渡タ  
シ若シ拂方滞ルトモハ自ラ横濱ニ於テ運上ヲ  
集メテ其高ヲ充タスベシト許シタリ餘分ノ二  
百弗ノ事ハプルーキン氏本國ニ書翰ヲ送リテ  
云フ二三月以前彼等(日本政府)ニ書ヲ寄セ元金  
ノ拂方ヲ催促シテ出サシメンタメニ故サラニ  
利足ノ来ルヲ待ツト言送レリ固ヨリペシブロ  
ーク船ノ持主ハ利足ヲ取ランイヲ願ハス之ヲ  
待チ受ケタルイナシ予モ亦敢テ持主ノタメニ  
利足ヲ請ハス只元金拂方ヲ催促シタルノミト

プルーモン氏ハ事務ヲ行フニ如此ノ奇方ヲ用  
ヒテ之ヲ以テ自ラ是トシテ議論ヲ立ツ是等  
事ハ好事家ノ説モアルベケレハ爰ニ論セス交  
際學者ノ務ムル所ハ只當時日本ヨリ外國政府  
ノ文書ノ往復ヲ調ベテ是ヲ以テ自ラ満足スル  
ノミ備テ是償金ノ事件ハ始メテ治マリタリ又  
下関事件ニ付キ合衆國ヨリ日本ニ要シタル件  
々ノ中聊カタリ氏道理アルモノハ是レ而已ナ  
リ又八月十日ニプルーモン氏ノ曰ク持主ハ僅  
カノ害ヲ蒙リテ許多ノ償金ヲ請取ルヲ得タリ

ト又是時プルーモン氏ハ夫ノ合撃ノ舉ヲ相助  
ケタリ但シ其出帆ノ日ハ同月二十日ト定メテ  
夫ノ償金ノ事件落着ノ日未タ到ラサルニ先ツ  
出帆ニ及ヒタリ

當時オランダノ公使ノ処置ヲ尋ヌルニ明細ニ  
之ヲ知ルニ由ナシ然レモ思フニ政府ノ制ヲ受  
ケズシテ便宜ニ從テ処置スルヲ許サレタリ  
日本人ヨリ外國人ニ對シ最後ニ猶豫ヲ願ヒシ  
ハ八月十九日ノ事ニテ是時日本外國事務ノ全  
權四ヶ國ノ公使ト應接シテ曰ク日本政府ノ尤

モ希望ニル所ハ方今何レノ外國ニ限ラズ凡テ  
自ラ手ヲ下シテ処置セザラン事ナリ、勿論大君  
ノ策ヲ施サントスル意ナキニアラザレ氏種々  
ノ原由アリテ止ムヲ得スシテ延引スルナリ其  
原由トハ就中江都ヨリ北ノ方ノ諸州ニ動乱起  
リ止ムヲ得スシテ其向キ大軍勢ヲ送レリ勿論  
大君政府ノ意ハ策ヲ施シテ下関海峡通行ノ妨  
害ヲ除クニ在リト又曰ク實ニ事大ニ延引セシ  
カ御老中内閣ノ猶希望スル所ハ外國ノ公使大  
君政府ノ処置ヲ待ナテ而メ自ラ手ヲ下シテ海

峽ヲ押シ開カサラン事ナリト是應接ノ詰問江  
都ノ政廳ノ尽力シテ長州ト談判シテ事ヲ治メ  
ントセシ事ニモ説キ及ビテ合衆國ノ公使問テ  
曰ク和談ヲ遂クヘキタメニ策ヲ施コシ殊ニ長  
州侯ニ使者ヲ送ルノ策ヲ用ヒシニ其使者侯ノ  
領地ニ於テ殺害ニ遇ヒシト云フハ實ニ然リヤ  
ト日本役人答テ曰ク使者ヲ送リタルハ實ニ然  
リ而メ其歸リシ者ハ從者ノミナリト  
是議論中外國大長州侯ト通信セントセシハ僅  
カ一度ナリ夫レハ是ヨリ先キ書生二名ヲ長州

ヨリ英國ニ送リテ教育ヲ受ケシメシカ是ニ至  
テ横濱ニ歸リ而メ君侯ニ謁シ外國人ト戰爭ス  
ルヲ諫メ止メントセリト云フ依テシヤリユセ  
ルホルドアールコック此兩書生ノタメニ其本  
州ニ歸ルノ便利ヲ得セシメタリ是レハ何ノタ  
メナリヤ蓋シアールコックヨリアールリユセ  
ルニ送リタル書翰ニ曰ク予カ心配スル所ハ可  
成ハ至極ノ場合ニ至ルヲ避ケン事并ニ長州侯  
ノ設ケタル城砦并ニ障碍物等ヲ悉ク實驗シテ  
其大小形勢ヲ知ラントスルニ在リト即チ右兩

書生ヲ以テ英國蒸氣船ニ載セ四ヶ國ノ公使ヨ  
リノ書翰ヲ持タシメテ之ヲ送リタリ是時第二  
等ノ軍艦一艘ヲ之ニ添ヘタリ偕テアールコッ  
クノ説ニ據レハ此舉ノタメニ二十日ヲ費ヤシ  
タリト虽モ長州ノ事情ノ如キハ少シモ之ヲ知  
ルヲ得ズト又臺場測量ノ事モ何如様ノ事ニ  
及ヒシヤ其事傳ハラズ而メ當時ノ人ノ言フ所  
ニテハ全ク其功ナキカ如シ然レモ吾人ノ思フ  
ニハ豫シメ己レノ決断スル所ニ蔽ハレザルモ  
ノハ是レ得失ニ付テ別ニ確説有ルベシ偕夫

ノ両書此其企ヲ試ミシ後ニ述ヘタル事件ハ英  
國公使館ノ通辨官ノ一人ナルサトウ氏ノ報告  
ニ拠レハ左ノ如シ夫ノ両書生ハ長州ノ趣意ヲ  
通達スルヲ命セラレ即チ外國人ニ云フ自ラ  
君侯ニ謁メ四通ノ書翰ヲ渡セシニ君侯ハ家老  
其事ニ付キ相談セシカ到底左ノ事ニ決着シタリ  
即チ四通ノ書翰ニ陳述スル趣キハ君侯全ク其理  
アルヲ知ル又外國ノ兵力ト競フノ能ハサルモ  
亦能ク之ヲ知ル然ルニ一タヒ大君ヨリ命ヲ受ケ  
又再三御門ヨリ命ヲ受ケテ事ヲ行フ者ニシテ

而ノ已レ意ニ任カスルヲ得ス是故ニ先ツ其免  
許ヲ受クルニアラガレバ外國ノ希望スル返答  
ヲ為スニアタハズ右ノ免許ヲ受クルタメ上京  
シテ其見込ヲ奏聞セント欲ス是レハ九ノ三  
ケ月ノ時間ヲ費スベシ依テ願ハクハ三ケ月ノ  
間事ヲ延引セントヲト措テ既ニ二十日ノ時間  
ヲ許シテ書翰ノ往復共ニ城砦ノ視察ヲ行ハシ  
メタリト虽モ更ニ九十日ノ時間ヲ大君ニ許シ  
内亂混雜ノ地ヲ經テ京都ニ上リ天子輔相ヲ進  
メテ其國政ヲ変セシメ外國ノ要スル條約ヲ表

知セシメントスルハ思ヒモヨラサルナリ況  
ンマ今戦争ノ用意調ヒタルハ右ノ如キ万一ノ  
事ヲ僥倖シテ延引スルコトアタハズ尙當時ア  
ルコソクノ言フ所ニ拠ルニ今度書翰ヲ送リタ  
ルハ全ノ功ナシト云ヘリ

此一帑ノ軍艦討平ノ命ヲ奉シテ八月二十八日  
二十九日ノ兩日ヲ以テ出帆セリ其内九艘ハ英  
國四艘ハ和蘭三艘ハ佛國ノ軍船ナリ又タキヤ  
ン号ノ小船士官一人兵士数人ゼーハスタウン  
号快戦船ヨリ大砲一門ヲ借りテ之ニ備ヘタル

者ハ米國公使ヨリ遺<sup>遣</sup>ハサレタリ其意謂ラク己  
レハ固トヨリ軍兵ヲ装<sup>遣</sup>スル程ノ自カハ無ケ  
レトモ最モ此舉ヲ喜ヒ左袒スルノ氣概ヲ表ス  
ルナリト四ヶ國ノ公使連名ノ旨趣書ヲ以テ此  
度ノ剿絶ノ舉ハ必ス徹底ニシテ餘蘊ヲ残サ、  
ル可キ由ヲ決議シ之ヲ知告セリ其旨ハ長州侯  
ニ向ケテ發<sup>遣</sup>セル軍兵ノ勢ニ依テ候ヲ恐縮セ  
シメ彼ヨリ彈丸ヲ放發セストモ海軍士官等必  
ス彼カ砲臺ヲ破却センコトヲ欲スル由ノ議ナリ  
且又此ニ討ノ師ハ法外ノ兇徒若シクハ海賊ヲ

護尉スルノ舉ト見做サル可キナリト云ヘリ  
サイル、アールコック氏私ニ之ニ附言シテ下ノ  
関ヨリ遠ク隔リタル府城ニテ同シク長州一属  
スル萩ノ城ヲ降スナラフ云ヘリ

九月五日ニ攻撃ヲ始メ三日間引續キタルハ日  
ニハ諸砲臺ヲ盡ク打スクメ其中ニ備ヘアル大  
砲ヲ取テ船中ニ搬運スルノ業ヲ為セリ之ヲ為  
シ居タリシ時ニ當テ此大名ヨリ使者ヲ送リテ  
和議ヲ計ラント云ヒ来レリアドミラールク  
ーペルノ書状ニ云フリールアドミラールジター

レスト相談シテ長候ノ所願ノ眞実ナルヲ證ス  
ル為メニ候カ自筆ノ願書ヲ取置ク可キ一肝要  
ナリト決セリ而シテ使者ヨリ申立ニハ右通信  
往復ノ時間兩日ハ掛ル可シトノ事ニ就キ此時  
間休戦ヲ為スコシト決約シ速カニ諸軍艦ニ令  
シテ休戦ノ旗旆ヲ掲ケシメタリ然レモ亦當時  
既ニ砲臺ノ大砲ヲ船中へ搬運スルノ業ヲ為シ  
居ルヲハ廢止スマシキ由ヲ約セリ依テ猶此業  
ニ従事シテ遂ニ之ヲ果セリト云ヘリ~~悉~~シク言  
ハハ白旗ハ攻兵ヨリ日本人ニ其戦業ヲ止ム可

キ一ヲ論シ外國人ノ方ニテハ猶間断ナク此業  
ヲ為スタメニ揭示セルナリ

海陸教度ノ戦争ハ自然列邦ノ全勝トナリケリ  
アドミラルルクローペル今ハ自ラ談判ノ役目ヲ  
勤ルラ便宜ナリト思ヒシカハ尔後長州ノ使者  
ト會見ノ時通常外國官員ノ驕傲ナル故態ヲ為  
シテ縱令ヒ長侯ハ帝ノ譴罰ニ依テ閉居シ戶外  
ニ出ル一能ハサル由ハ既ニ承知ノイナレドモ  
必ス侯ノ自身ニ來會有ラン一ヲ望ム旨ヲ主張  
セリ又宣言シテ云フ同氏及ヒ其部下ノ者萃下

ノ関ノ府中ヲ遊覽ス可シ若シ其時其中一人ニ  
テモ襲撃ヲ被ル一ヲラハ怒チ全府ヲ破壊ス可  
シ縱令ヒ現今人氣騷立チ惡漢兇徒其地ニ徘徊  
シ其地方官負能ク各人ヲ視察制止スルヲ得ス  
トノ告知ハ有リタルトモ許シ難シト云ヘリ又  
告テ云フ下ノ問<sup>問</sup>ノ府中ヲ宥免スルノ謝礼及ヒ  
戦陣ノ費用ノ償ヒトシテ償<sup>金</sup>ヲ出ス可シト又脅  
迫シテ云フ方外國ノ所望二日ノ内ニ盡ク承諾  
セサルナラハ下ノ関ヲ取り嘗テ休戦ノ議無カ  
リシカ如ク戦争ヲ為ス可シト云ヘリ且日本



諸侯ノ長州ト敵タル者ニ備ル為メナリトモ決  
シテ堡砦ヲ設クルノ權理有ル可カラス若シ然  
カセサルナラハ歐人ノ亞細亞諸國ヲ征伐スル  
ノ例ヲ以テ敵人降伏ノ時之ヲ困難ノ極ニ置ク  
ノ處置ヲ行フ可シ是レ其天然ノ力強キヲ知レ  
ハナリト云ヒ聞カセタリ償金ノ事ニ就テハ日  
本ノ使者ヨリ何程位ナリヤト問ヒ且其領國ノ  
上リ高ノ定額ヲ示セリ時ニアドミラールタ  
ペル曰ク余輩ハ全ク此地ノ貢税ノ多寡ヲ以テ  
算計ヲ立ツル能ハス彼レ(長州送外國ト戦争ヲ

始メサル前ニ預メ此入費ヲ算計シタルナリ可  
シ彼レハ今望マレタル丈ケノ金高ヲ拂フ可シ  
ト云ヘリ使者ノ首長曰ク我カ所有スル金高ヲ  
リ多クヲ出ス一ハ決シテ成リ難キ一ナリ我ハ  
甚々和平ヲ欲スレト我カ國力ニモ亦限リ有リ  
早速ニ之ヲ拂ハン一ハ其金高ノ多少ニ回レ可  
シト云フアドミラール之ニ答テ曰ク彼レ若シ  
自分ニ其金ヲ有セスハ之ヲ政府ニ借ルヲ得可  
シト云ヘリ原來クペルハ長州ノ政府ニ對シ  
テ顯然タル警敵タル一ヲハ最モ能ク洞知セリ

然ルニ其言終始勝者ノ敗者ヲ蹂躪シテ塵土ニ  
委セントスルカ如キ態ヲ為セリ

彼等此談判ノ序ニ外國船へ攻撃ヲ恣ム可キ由  
ノ命令書ヲ出シ示セリ然レモ明カニ之ヲ辨ス  
ルノ事無シ大君ノ名署セル書付ハ唯帝ヨリノ  
攘夷ノ命令ニ答ヘタル書付ニテ其言左ノ如シ  
余謹テ皇帝陛下ニ申ス外國人ヲ掃攘スルノ時  
期ニ於テハ五月ノ十日ヨリ彼等ト必ス交通ヲ  
絶タンイテ決定セリ余此決議ヲ以テ諸侯へモ  
亦布告ス可シト云ヘリ江戸政府ノ首宰ヨリ嘗

テ長州へ直達ノ通信有リシ由ハ言ハサリキ然  
レトモ其次ノ横濱ニテノ四ヶ國ノ公使ト日本  
宰相トノ應接ニハ公使等ヨリ此號令有リタリ  
シト云フイテ取テ談判ニ及ヘリ佛國公使曰ク  
此事今ハ最早眞實ニシテ疑フ可キ者ニ非ラス  
アドミラルルノ手許ニ差出セル書付ヲ以テ先  
ル時ハ長州侯ノ暴挙及ヒ條約ノ破壊ハ其実帝  
及ヒ大君ノ所為ナルヲ證ス可シト云フ時ニ日  
本官負ノ首長速カニ答テ曰ク大君ヨリ外國船  
ヲ砲撃ス可キノ命令ヲ出セシテ嘗テ無シ且ツ

政府ヨリ長州ノ所為ヲ抗爭スルノ事實ハ即チ  
此候ヲシテ敵對ノ所業ヲ止メシメント使節ヲ  
送リタルヲ以テ證ス可シ其使者ハ使事ヲ果サ  
ント欲スル間ニ暗殺ニ逢ヒタルナリ又大君ノ  
意趣曖昧ニシテ兩意有ルカ如キハ既ニ説明シ  
テ諸公使モ其已ムヲ得サルノ事情ヲ理會セシ  
事ナリ其故ハ大君若シ帝ヨリ受タル命令ヲ施  
行スルイヲ公然ニ拒ム時ハ其身廢セラレ其朝  
七ヒナントスルノ恐レ有レハナリト云ヘリ公  
使等ハ其問罪ノ辞柄廣漠ニシテ確証ト為ス可

キ事無シト雖モ自國ノ政府ヘモ又日本ノ政府  
ヘモ之ヲ引込マス事ヲ言ハス再度此會見ノ  
時ニ於テ諸使種々ノ了見隨意ヲ以テ日本内國  
ノ事務ノ法制ヲ教令セント欲セリ  
長州ヘ大君ヨリノ指令有リシト云フ事件ヲ説  
キ終ル前ニ先ツ云フ可キ一事アリ江戸政廳ノ  
前ニ出テ執行セル處置ノ容子ト又十月十日ニ  
横濱ヘ來リシ長候ノ特命使節ト談判セル處置  
ノ容子トナリ九月十八日ニ大君ノ執事者ニ對  
シテハ奮然トシテ云フ外國船ヲ襲撃セシ事件

ハ其責総テ卿カ君主ノ上ニ在リト云ヘリ其後  
二十二日過キテ長州ノ使臣己レカ便利ノ為メ  
ニ此責任ヲ大君ノ上ニ帰セシメント議論セシ  
時ニ於テハアールコック氏及ヒプリュイン氏  
反對ノ論ヲ執リ是レ既ニ自分等ヨリ言出ヤシ  
論ナルヲ却テ以テ非ナリトシテ之ヲ拒メリ然  
カノミナラス新タニ此事ノ体裁ヲ定ムルノ勞  
ヲモ為サス曩ニ大君ノ執政ヨリ己レ等ニ返答  
セシ論及ヒ辞ヲ其終己レ等ノ説トシテ用ヒタ  
リ世ニ所謂日本両面説ノ策略ト云フ説ハ多ク

ハ此人々ノ処置ニ基テ起レルナリ  
サイル、ルートル、フレルド、アールコックヲ誣フ  
ルノ形状ヲ避クル為メニ爰ニ左ノ事ヲ説ク可  
シ英國ニテハ攻撃ヲ非トスル初時ノ命令ト違  
ヒテアール、テツセル十二月二日ニ萬事落着ノ  
後書状ヲ送リテ云フ九月廿八日足下ノ狀此  
書状中ニ征討勝利ノ事ヲ記載セシ者ハ足下ノ  
骨折有リシ策略ノ遂ニ成功有リシヲ表ハセリ  
ト云ヘリアールラツセルハ此今祿賛セル事柄  
ニ就テ其心中ニ全ク明了ナリシヤ否ヤハ蓋シ

疑に有ルヲ免カレヌ如何シトナルニ同シ書信  
ノ内ニ七月廿六日ノ其書状ノ事ヲ舉テ云フ此  
書状ノ趣意ハ猶全ク行ハル、事ト御合点有ル  
可シト云ヘリ但シ七月廿六日ノ書ニサハルル  
リテルフラールドノ自身防備ノ外ハ兵ヲ動カ  
スノ舉ヲ禁セラレシ事有リシヲ思フ可シ然レ  
氏此事件ノ處置ニ就キ毎度本國政府ノ判断不  
都合ナリシ事甚タ多カリシニ比スレハ是等ノ  
不都合ハ大ナリトスルニ足ラサルナリ

○

今此成果ヲ得タル事件ノ結局ニ來レリ即チ償  
金ノ取立方及ヒ日本ヨリ漸次ノ拂方ナリ  
此事ニ於テ外國公使ノ主意ハ最初千八百六十  
四年九月二十三日四ヶ國ノ公使ト大君ノ執事  
者ト談判ニテ一決ノ形ヲ為セリ此應接ノ説ハ  
コンブ井デンチアルト題シテ米國コルハスボ  
ンデンスノ中ニハ出板セラレタレトモ莫吉利  
ブリユーブツクノ中ニハ見エサリキ英國ノ公  
使総代ニテ云ラク此要求若シ迫ラハ必然甚タ  
多分ナル金高ニ上ル可シ然レトモ金ヲ取立ル

ハ我カ所願ニ非ラスト云フ是故ニ又告ケテ云  
フ大君右償金ヲ拂フノ代リニ下ノ関ノ港若シ  
クハ其近邊ニテ其レヨリ便利ナル港ヲ條約諸  
國ノ選擇ニテ開港アル可キ處置ヲ為ス可シ  
ト云ヘリ其後江戸内閣トノ應接ニ再ニ此事  
ヲ提起シ長州侯ハ下ノ関ノ開港ヲ望ミ居ル由  
ヲ以テ證據トセリ但シ此言ハ更ニ確證無キ  
者ナリ官負之ニ答テ曰ク他港ヲ開クヲ承諾ス  
ルハ我カ為スヲ得サル所ナリ故ニ償金ヲ拂フ  
方ヲ擇取ス可シト云ヘリ外國公使此時ヨリ當

今ニ至ル迄常ニ此開港ノ事ヲ主張シ近頃ニ至  
リテ其要需始メニ比スレハ更ニ大キク為リテ  
全國ヲ通行スルノ自由ヲ望ムニ至レリ政府ニ  
テハ之ニ反シテ其國ノ危害ト為ル可キ申シ出  
シテ抵抗スルヲ猶モ撓ムヲ無シ  
十月二十二日ニ條約ノ調印有リ此約書ニ償金  
ノ拂フ可キ高三百萬弗ト定メタリ日本ニテハ  
斯ク莫大ノ金高ニ就テ更ニ苦情ヲ言フヲ無  
シ又縱令ニ苦情ヲ云ベタリトモ必ズ許諾ハ無  
カリシナル可シ此償金高ハ太過ナリト謂フ可

レ是レ故サラニ太過ナル様ニ目論見タルトナ  
ルハ此惻然ナル處置ニ關ヤル事實ヲ見テ知ル  
可シ諸公使一致シテ此要求ハ大君ノ拂フヲ得  
サル程ノ過多ナルヲ要ス僅カノ要求ナレハ速  
カニ皆濟スルヲ得可シ苛刻ノ取立ハ彼ヲシテ  
己ムトヲ得テ他ノ港ヲ開クノ要請ニ從ハシム  
ルトモ有ル可シト決意セリアリユイン氏ハ此策  
畧ノ事ヲ隱クサス之ヲ公言セリ若シ然ラズハ  
此事永ク世人ニ知ラレサリシナル可シ同氏曰  
ク日本委員ニ應接スル前ニ英國公使ト余ト相

議シテ償金ノ高二百萬弗ト定メタリ時機ニ乘  
シテ強迫ヲ為サン「策ハレオン」ロセス氏ヲ  
リ出タリ「アリユイン」氏速カニ其說ニ同意シテ三  
百萬弗ト定ム可キニ決セリ其意ハ是レ實物ノ  
償トシテ開港ヲ以テ之ニ代フルヲ促カスニ至  
ル可キヲ以テナリ同氏又去フ今定ムル所ノ金  
高ハ道理無シト見做ス可カラスト云ヘリ此金  
高ハ同氏自ラ道理ニ合ヘリト云ヒシ金高ヨリ  
ハ恰モ半分多カリナリ  
此約定各ノ政府へ通報セシ時ニ申出セル二箇

條ノ内何レカ可ナル可キト議論久シク決セス  
和蘭及ヒ佛蘭西ハ金ヲ拂ハル可キト便ナリ  
トセク米國ハ何レニテモ可ナルノ様子ニ多  
ク其通信往復ニ預カラス英國ハ後來ノ利益ヲ  
明白ニ洞悉セシ故ニ新港ヲ開カシムルトニ尽  
カセリ然レトモ日本ニテ金ヲ拂フニ決シテ地  
ヲ讓ルトヲ為ザルノ報告有リシ故ニ此等ノ議  
論総テ無用ト為レリ時ニ日本ヨリハ其國ノ財  
計困難ノ状ヲ述ヘ初發四季ニ拂ハント云ヒシ  
約定ヲ弛ラレントヲ請ヘリ此請ヲ回達セシ

時英國公使ノ留守ヲ預カルシヤルジノ書状ニ云  
フ余ハ日本政府下ノ開港ヲ許スヨリハ償  
金ノ高倍スルトモ寧ロ之ヲ拂ハント欲スルヲ  
信セシニ大君府財計ノ様子等ヲ見テハ三百万  
弗ノ如キ巨大ノ金高ヲ拂フノ義務ハ甚ク憂フ  
可キ勞ナル可キヲ知レリト云々又斯ク巨大ノ  
金高ヲ拂フトニ就テハ日本受府ノ財力限り有  
ルヲ知ルニ足レリト云ヘリ然レトモ日本ノ請  
ヲ許ルサス此機ニ乘シテ新タニ交易ノ便宜ヲ  
謀ラントヲ告ク其方法ハ港稅ヲ減スルト若シ



クハ約束ノ時期ヨリ前ニ兵庫ヲ開港スルノ  
如キ即チ是ナリプルーイン氏ハ日本ニ時間ヲ延  
引テ許ルスヲ拒メリ他ノ公使モ同説シ由ハ四  
月廿四日ノ被カ書状中ニ見エタリ同氏云フ右  
ノ延引ヲ許ルス可カラストノ説ハ余カ同僚等  
共ニ同論ナリト云ヘリ其結末ハ英國ヨリ左ノ  
約定ヲ以テ総金高ノ三分ニテ許ルサント云フ  
トテ新々ニ言出セシメナリ其約定ハ即時ニ兵  
庫及ヒ大坂ノ交易ヲ許ルス一ノ大君ノ條約書ハ  
帝ノ承認有ル可キ一ノ通例ノ百分五ノ税額ニ基

テ港税ヲ減ス可キ一ノ等ナリ英國外務局ニテハ  
和蘭及ヒ佛國政府ニ此方法ノ便利ナルヲ説示  
スニ盡カシ遂ニ此等ノ國ヲシテ已ムテ得々許  
諾セシムルヲ得タリ米國ハ前ノ如ク依然トシ  
テ關係セヌ容易ニ何事ヲモ承許セリ之ニ依テ  
千八百六十五年十一月四ケ國ノ公使最初ノ年  
賦金五十万弗ハ既ニ八月拂ハレタレハ公然ニ  
新規ニ定ム可キ約定案ヲ呈セリ日本政府ノ談  
判納得ノ意ハ右約定ノ二箇條ヲ直チニ承諾セ  
シニテ表ハレタリ然レトモ此諸港ヲ速カニ開

クノ事ハ猶實地ニ施シ難キ由ヲ言ヘリ  
新任ノ公使ワリハルリ、パークス、ス、如クア  
ル可シトテ同意シ九月二十八日ニ此諸地ハ外  
國商人危難ニ罹ルヲナク安全ニ住居ナシ難カ  
ル可シト記セリ

然レモ切ニ他ノ准許ヲ採用セリ故ニ同公使我  
輩ノ何レニ從ハントテ論スル償金ノ三分ノ二  
ニ換<sup>可</sup>キ約定ノ中チ日本帝ト條約ヲ取リ結  
ヲ最モ好シトスト記セリ而シテ又税ヲ減スル  
ハ只ニ約定期限ニ二年前ニ貿易場ニ個處ヲ開ク

ヨリ永キ利益タルハ明ラカナルヲ以テ各國公  
使ノ望ミシ三個所ノ中チ二個所ヲ得シルヲ以  
テ又別ニ減税ヲ望ミシト想像ス可キハ理<sup>ナ</sup>  
キニアラザレモ左ニアラスサリハルリ、パー  
クスノ此ノ見込ハ都テ他ノ公使ノ此見込ヲ公  
ニ知セルト云フ可シ故ニ兵庫大坂ノ兩地ハ安  
全ニ住居ナシ難シト察マルヲ以テ同公使云ク  
此兩地ヲ得ルニアラサレハ假令モ我輩ヨリ償  
金ノ換リニ望ミシ三ヶ條中ニヶ條ヲ得ルトモ  
償金ヲ減マサル可シト此說ハ西洋各國ノ東洋

各國トノ談判ヲ為スニ基ケル平均説ヲ以テ管  
理<sup>ニ</sup>之ヲ解明セルナリ而シテ此説ニ各國政府  
同意セリ

前條ノ商議ヲ大坂ニテ為シテ此地ニ大君其  
臣下共ニ長州ト受府ノ事ニ就テ諸事ヲ管スル  
為メ在留セリ此時<sup>ハ</sup>リウエテルホルド<sup>ニ</sup>アール<sup>コ</sup>  
ク日本ヲ去ラントスル時ノ終リノ公翰ヲ送レ  
リ云ク日本トノ都テノ條約ハ此條約ヲ勢カク  
用<sup>ユ</sup>ルヲナシニ永續セシメント欲スルヲ以テ  
嚴格ニ取結ヒタリ<sup>ト</sup>雖モ今ハ勢カク用ヒサル

ヲ得サルニ至レリ而シテ斯ク<sup>ハ</sup>如キ國ニ於テ  
公使ノ職掌ヲ盡サシニハ勢カク使ハサルヲ得  
ス若シ勢カク使ハガレハ職掌ヲ尽スヲ得ヌト  
此説ト新任<sup>ト</sup>公使ニ同説ニテ此度ノ應接地ニ  
自國ノ海軍ヲ率<sup>テ</sup>之レニ加フルニ佛蘭西國ノ  
軍艦共ニ行キタルヲ以テ其勢ト強大ナリシ而  
シテ此應接ノ終リニ於テ同公使ヨリロルドク  
ラレンドンニ書ヲ送レリ其畧ニ云ク予船隊ヲ  
指揮スルハ此度ノ如ク只ニ和平ヲ整ヘン目途  
ト雖モ其責ノ重キヲ受ケタリト思ヘノ然レ<sup>ル</sup>

貴君ノ示教セル目途ヲ達スル為メニハ之レニ  
過キノル策ナシト考ヘリト此公使之レヨリ前  
ニ此度ノ好機會ヲハ盟約權理ヲ保護スル此策  
ヲ緩ニナシテ失ス可カラスト云ヘリ此公使ノ  
交際法ハ勢カヲ使ヘリ

大君政府ノ終ニ覆崩ニ至レル前數ケ年ハ入  
憂鬱苦心シテ過キ去リシカ就中千八百六十七  
八ノ兩年ニ大君政府大ニ窮セリ殊ニ西度ノ賦  
還各五十萬弗宛約定期限ニ拂ヘリ而シテ之レ  
ヨリ後ハ大ニ延引セリ而シテ千八百六十七年

三月ニ又償金ヲ催促セシ所日本人之レニ答テ  
云ク千八百六十五年ニ減稅等ノ望ニ隨ヘルニ  
由リ貨幣ヲ集ムルノ難カル上尚一層難クナレ  
リ之レニ由テ尚延期ヲ望ムト各國公使此望ミ  
ヲ許諾セリ其後千八百六十八年維新亂起リ  
之レニ由テ江戸政府亡ヒ其權ヲ京都政府ニテ  
操リ而シテ前年ヨリ更ニ日本國窮セリ而シテ  
新政府償金延期ヲ望ミ而シテ望ヲ達スルニ得  
ハ其代リトシテ絹絲茶ノ輸出稅ヲ騰スルヲ延  
引ス可シト云ヒ送レリ日本政府專權條約ニテ東

縛セラル、ト雖モ今此品、税ヲ騰ス權日本政  
府ニアルヲ以テナリ其後此互換ヲサーハル  
パーソンス許諾セリ

日本ニテ及フ丈ケ償金殘金ヲ拂ハサルニカ  
ラ尽セルトテ記載セザルヲ得ス而シテ日本ニ  
テ此償金ヲ不正ナリトセシハ只ニ年月ノ過  
ルニ隨テ益々強クナリ千八百七十二年ニ日本  
大使盟約國ヲ巡訪セシキ合衆國ニテ請取ル可  
キ償金分配ヲ最早同國ニテ請取ルマシト云ハ  
ル程ノ證ヲ表シテ大使ヲ善ク款待セリ而シテ

此償金減數ヲ議院 出セシカ議員ノ為メニ延  
引セラレタリ之レ慇懃親睦ヲ表スル為メニハ  
盡セリト雖モ公道正義ヲ示スニ足ラス合衆國  
ノ臣民及ビ政府ノ下ノ關事件ニ於テ損失スル  
金凡ソト五十萬金ニテ日本ヨリ請取ラシムル償  
金ヲ同國ノ貨幣ニ換ヘテ差増シ及ビ利金ヲ加  
ハレハ七十萬ドルニ超過ス然ルニ此一事スラ  
決シテ行ハザリシ  
日本大使英國滞在中ニ同國ノ外務省ニ一書ヲ  
送レリ此書中ニ判然ト書サバレバ殘償金ヲ拂

ハサラントヲ見ヘルナリ其書ニ云ク英國ハ貿易ヲ廣大ニ開クトヲ目途トス然ルニ日本ヲシテ堪ヘ難キ借金ニ苦マシム之レ英國ノ目途ヲ助クル所以ニアラス而シテ償金ニ代<sup>レ</sup>可キ緊要事物ヲ大君及ヒ御門政府ニテ施行セル件々ヲ掲載シテ云ク千八百六十六年ニ税ヲ減シ條約ヲ皇帝ニ准許シ大坂ヲ約定期限ヨリ早ク開キ開港場及ヒ海岸ニ沿フテ燈明臺ヲ建築シ其費百万弗ニ越ユト此時ワールバールトクス英國ニ在リテ前書ノ答ノ委任ヲ受ケタルヲ

以テ減税ニ大使ニ論シテ云ク之レ條約期限ヨリ早ク税則ヲ改正セルナリト此說ハ謬レリ税則ヲ改正セルニアラス大使ノ曰ク我輩ハ條約改正ニ就テ約セル十年前ニ我國ノ税則改正ヲ望マレタリト之レニ由テ見ルニ加奈川開港以來五年ニ必スシモ税ヲ減スルニアラス只ニ輸出入税ヲ變スルヲタルヲ明白ナリ且ツ日本人ハ漸ク始メハ思モヨラザリシヲ知ルニ至リ

税則ハ條約中緊要ナル箇條ニシテ此箇條ヲ變スルハ<sup>余</sup>條約ヲ再考スル時ニ関スルヲツク會

マレニ至レリ故ニ千八百六十五年ニ望マレタ  
ル約ハ税則改正ニアラス乃チ減税タルト明白  
タル可シ故ニ減税ニアラスト云ヘル論ニ伏セ  
ザルナリ而シテ減税ハ勢ヲ使フテ命シテ之レ  
ニ隨ハシメシナリ且ツサハルリーパークス  
ノ辞ニ云ク改正税則ハ舊税則ヨリ日本人ニ大  
ニ利アリト之レ此ノ英公使ノ正シキ罪證ナリ  
然シ此可否ハ世界ノ議論ノ一ナリ而シテ日本  
人ハ當時ノ税賦ハ國ヲ衰微セシムルト云ヘル  
トハ全國ノ人都テ知ルト虽モ實地ノ場合ニハ

其害ノ有無ニ著目ニサレラ以テ茲ニ及ヘルナ  
リ茲ニ及ヘルハ自然ニアラス望マレテ隨フタ  
ル許可ニテ實ニ一時ハ償金ノ抵當物トセルナ  
リ而シテ若シモ此税則ニテ日本ヲ富マセシナ  
ラハ英國トノ此約束ヲハ望ヲ満足セシムル為  
メノ許可ト云フ者ナカル可シ  
又サハルリーパークス云ク御門ノ條約准許  
ヲ嫌ヒシハ敵意タルヲ日本人知ル可シト此説  
ハロルドグランベル日本大使ト應接ノ節ニ云  
ヘル辞ナリ而シテ茲ニ再々無用ノ辯ヲ費セル





セハ後年ニ至リ之レ等ノ物ヲ發明シテ設立ス  
ル者ヲ賞セザル違約ヲ責ムルニ不都合タル可  
シ若シ日本ニテ燈臺ヲ建築スルニ百万弗ヲ費  
シ外國人ノ安意保護ニ備ヘシナラハ日本人ノ  
義務ヲ大ニ盡セルト大ナリ而シテ日本人モ亦  
之レニ由テ利ヲ得ルトテ義務ヲ尽セルヲ感ス  
可カラズ

大使盡カセリト雖モ事ヲ果サス只ニ得シ所ハ  
若シ今尚日本ニ行ハル、貿易交誼ニ障礙ヲ為  
ス者ヲ驅逐セントシ擔當マハ前條ノ論ヲ思考

ス可シト云ヘル約而己故ニ千八百七十二年ニ  
至リテモ此償金ヲ外國貿易ヲ盛大クシム最  
モ勢カアル機器トシテ用ルルヲ舊ノ如ク依然  
トシテ変スル事ナシ而シテ此償金ヲ始メヨリ  
日本ニテ拂フニガラ及サル割合ニ定メタリ其  
如ク日本ニテ強約ニ遇フト雖モ其償金ヲ拂フ  
カラナキヲ以テ數度随意ノ望ニ應ス可ク逼ラ  
レタリ其望一トシテ三百萬弗ノ分配ヲ得ケル  
ヨリ外國ノ利益ニ於テ緊要タラザル者ナシ  
千八百七十三年大使帰朝ノ後間モナク各國公

使過半協同シテ一日モ早ク内地通行ヲ許スノ  
約ヲ得ント迫リシカ此時モ英佛蘭ノ三國ハ又  
例ノ償金ヲ以テ餌ト為シ如シ其功請スル所ヲ  
得ハ其報トシテ彼殘金ヲ恕スヘシト云ヘリ合  
衆國公使ハ獨リ此議ニ加ラス是レ此償金ノ事  
ニ就テハ本國曾テ論アリテ其餘殘ヲ受ク  
ラ欲セヌ一時ハ往年受クル所ノ者ヲモ合セテ  
之ヲ還附セントノ議起リシホドノイアリシニ  
因レリ故ニビンハム氏ハ微ニ此事ヲ日本政府  
ニ啓シ且ツ其受否一ニ國ノ命ニ從ハントテ自

カラ之ヲ決セヌ其私意ニテハ日本之ヲ授附ス  
ルモ受テサルヲ是トスルノ論ナリシ一昭々ナ  
リ然レズ此持論ノ人ハ獨リビンハム氏ノ  
シテ他ノ三公使ハ明ラカニ日本ノ許ルス  
得サル大報ヲ要シ之ヲ得ルニ非サレハ曾テ殘  
金ヲ恕スル一ニ與セヌ其最初ノ答ニ曰ク内地  
通行ノ禁假リニ金錢ノカラ以テ買フヘキ者ト  
スルモ百五十萬弗ハ獨リ均當ノ償ト謂フ可カ  
ラサルノミナラス曾テ均當ニ遊キテ得スト又  
其後ノ答ニ曰ク三國ノ公使ノミニテ日本開否

論ヲ專決スルヲ得スト即チ佛英蘭ハ償金  
ノ餘殘ヲ得テ假リ之ニ首肯ストスルモ日耳曼  
伊多利魯西亞等其他下ノ関事件以後ニ日本ト  
訂交セル諸國ハ之ヲ以テ強フルヲ能ハスト云  
フナリ然ルニ又日本政府ハ曰ク諸國ノ間ニ區  
域ヲ立テ某々ノ國ニハ之ヲ許シテ某々ノ國ニ  
ハ之ヲ禁スルヲ得スト是時ヨリ諸公使ノ論迫  
愈急ニシテ屢各國交際ノ礼容ヲ破リ聞クヲ忌  
ヒサルノ暴言横論ヲ吐キシヲアリ其後新年拜  
賀ノ令節ニ際シ遂ニ此事ヲ以テ直チニ帝ニ迫

リタリ是レ世ノ能ク知ル所ニシテ萬國未タ此  
ノ如キ例ヲ聞カス中外ニ論ナク識見アル人ハ  
皆之ヲ非議セサルナシ此時公使ヨリ獻スル所  
ノ書ハ之ヲ返還スルニ先ツテ外務省ニ授附セ  
テレ諛省ニ於テ其處置ニ就キ大ニ議論アリ  
シヲ終ニ帝ノ諭書ヲ副ヘテ之ヲ還附スルニ決  
シタリ是ニ於テ三國公使政府ノ終ニ屈ス可カ  
ラサルニ絶望シ又償金ノ事ヲ迫リケレハ日本  
更ニ之ト議スルモ益ナキヲ知リ千八百七十四  
年ノ夏終ニ其殘金ヲ英仏蘭ノ此事ニ與カル者

ニ交附シタリ  
右ニテ内地通行ノ論ハ一時止ム  
未ク止マヌ千八百七十四年八月十四日日本ヨ  
リ書牘ニ其近況ヲ載ス曰ク内地通行ノ論  
ニ就テハ歐洲諸公使ノ所為甚ク不信實ナリ數  
月已前諸公使ノ為セシ約ニ日本告シ其國ヲ放  
開セハ償金ノ諸求ヲ絶ツヘシト云ヘル言ハリ  
然ルニ日本ハ寧ロ其請求ニ應スルモ未ク全  
ク開ク可カラストノ論ニ殘金ヲ償ヒシル  
リ故ニ尋常ノ義理ヲ以テスレハ外國公使其旅  
行貿易ノ自由ヲ迎レテ是ニテ止ムハキニ公  
使等未シ其請ヲ絶ス既ニ日本ニ一難題ヲ諾  
セシメテ已レハ其前約ヲ踐マス全國放開ノ事  
ヲ迎レテ前日ヨリモ甚ク是レ譬ハ兒賊ノ  
ニ金ヲ得テ後又其命ヲ奪ハントスルヲ如シト  
合衆國公使ハ右ノ如クニシテ竊カニ本國政府  
及ヒ其人民ノ賞賚ヲ得ント期ヤシニ豈ニ料ラ

ニヤ華威頓外務省ノ見ハビンハム氏ト合ハス  
(且ツ其見恐ラクハ全國ノ輿論ニモ背ケリ)ビン  
ハム氏ニ令シテ曰ク此事ハ議院ニテ未ク決ス  
ル所アラズ且ツ三國既テニ之ヲ受クル上ハ獨  
リ之ニ異ナルヘキニ非ス故ニ他ノ諸國ト同シ  
ク之ヲ請ヒ且ツ之ヲ受クヘシト故ニ日本實辭  
ナク其全額ヲ渡シ且ツ其後敢テ不平ノ色ヲ見  
ハサスト虽モ合衆國ノ平生親睦友愛ヲ唱フル  
ハ皆是レ虛飾ノ言ナルヲ見ハ日本之ヲ快トセ  
サルト必然ナリ若シ之ヲ外務部ニ詰ラハ外務

卿ハ下院ノ議既ニ決スト虽モ未ダ上院ノ協同  
ナキヲ以テ之ヲ如何トスルヲ能ハスト云フナ  
ルヘシ然レモ是レ未ダ口實トスルニ足ラス若  
シ真ニ意アラハ豈其時宜ニ應スルノ術トカラ  
シヤ千八百六十七年ノ償額ノ如キモセワルド  
氏固ヨリ其延期ヲ許ルスノ權ナカリシヲ同氏  
敢テ法ニ觸ル、トナク之ヲ緩ウスルノ計ヲ得  
タルニ非スヤ

下ノ関償金一條ハ此ニ盡キテ前文言ヘルカ如  
ク他日四國ノ中或ハ之ヲ還附スル等ノ議起ル

マテハ復タ人目ヲ惹クヲナカルヘシ且ツ此ノ  
如キ事ハ蓋シ誓テ無キトニシテ加フルニ假令  
之レ有ルモ以テ今日ノ恨ヲ消滅スルニ足ラス  
日本ハ誓ヘハ一塊ノ肉ヲ削リ去ラレテ且ツ之  
カ為メニ血ヲ灑クト多シ然レハ他日何ノ國手  
アルモ能ク其傷痍ヲ醫スルヲ得~~ル~~又何ノ  
妙術アルモ多年ノ屈辱ト辛苦トヲ以テ印セ  
ル~~ル~~痕痕ヲ愈ヤスト能ハサルナリ  
右ノ事由ヲ纂輯スルニ廣ク公文ヲ引用スル  
ヲ得ス唯江戸ニ在リテ時々手ニ觸ル、所ノ詳

申書類ヲ魁聚魁セルノミニシテ是ニ蘭仏ノ往復  
文ハ窺フヲ得ス然レモ徧頗ノ心ナキ讀者ヲ  
シテ日本其數百年ノ暗冥ヲ出テ、文明ノ諸國  
ト伍スルニ字内ノ大國如何ニカ之ヲ獎勵誘掖  
セルヤヲ見セシムルニ足ルヘシ實ニ下ノ閑事  
件ノ記録ハ後世ニ留マリテ二十年間諸國ノ日  
本ト親好ヲ訂シ敬愛ヲ重ヌルニ勢カト云ヘル  
字上ニ構架セル交際法ヲ以テセルトノ遺證ト  
ナルヘキナリ



